同好



15

THE MAGAZINE OF MAN
HOMO SOCIETY

目　　次

詩

幻影の港で

杉　冬　樹

ぼくがその少年を識つたのも、やはりこのような霧のふかい冬の港街でした。

※

まだわずかに
のこつている街の灯の
彼方からやつてきた
孤独の影のように
淋しいみなりの
少年は
港のブイを
くろい波を
はしけを
なめる。

物語めく
しずかな夜
ひそかに
胸は高鳴り
ゆるされるなら
その少年と
童話と
イリユウジョンを
ないまぜて
燈台の光に
淡くぼかそうものを
思慕は
悪戯つ児のように……

※

愛とは……
少年よ
ぼくもきみのように
少年かもしれない
しかし昨日の
嵐の宵に
ぼくは烈しい
あおい日をながした
涙のなかに
きみがいる。
歌のない

よふけの港で
青年となつた
ぼくの幻影の日の
ひとり心
かなしいすがたを
少年にみる
ぼくの
思いがけない
ひとつの発見は
くらい波のしぶきに
消えていくだろうか。
霧笛が
たとえ（いたく）
心にしみても
かえらない想いを
想うぼく。
少年の日に
うたがいが
あの夢のように
何処へかえつていつたのか
しりたくて

港街に
淋しい口笛は
やはり今日のように
かるくながれることを
夜にとけこんで
考えている
少年と
ぼくと。

※

ぼくはその少年の背後で、しずかに彼のうしろすがたと
海を愛撫していました。

1960・10・16

忘却とは忘れ去る事なり

何にもない私の心　とっても
淋しくって　つい涙が出てくる

忘却とは忘れ去る事なり

四〇八号

忘却の中の生命
　静寂が　唯一の救い
想念は凝つて一丸となり
　汝が掌に生けると云えど
我が魂ぱくは低迷して
　汝が眼中にさまよう

快意の中の生命
　いん律が　唯一の慰め
願望は流動して止らず
　汝が掌に溢ると云えど
我が　快楽は倦むを知らず
　汝が眼前にたゆたう

流れゆくものは流れ　消えゆくべきものは
　凡て消え去つた後は
　　虚しい無

　何にもない私の心　とつても
淋しくつて　つい涙が出てくる

真珠　おまえのまるさ　おまえの輝き
私は哀し　おまえの光が私には無縁
どんなに深くどんなに清澄な彩りを持つといえども
私は救われぬ
　握りしめられて　息吐く生命の
ほとばしる激しい力も
　唯　生あるは死を迎え
　　死は生に連なると
無常の言葉にひしひしたる
　我が　孤独をかみしめさせるだけ

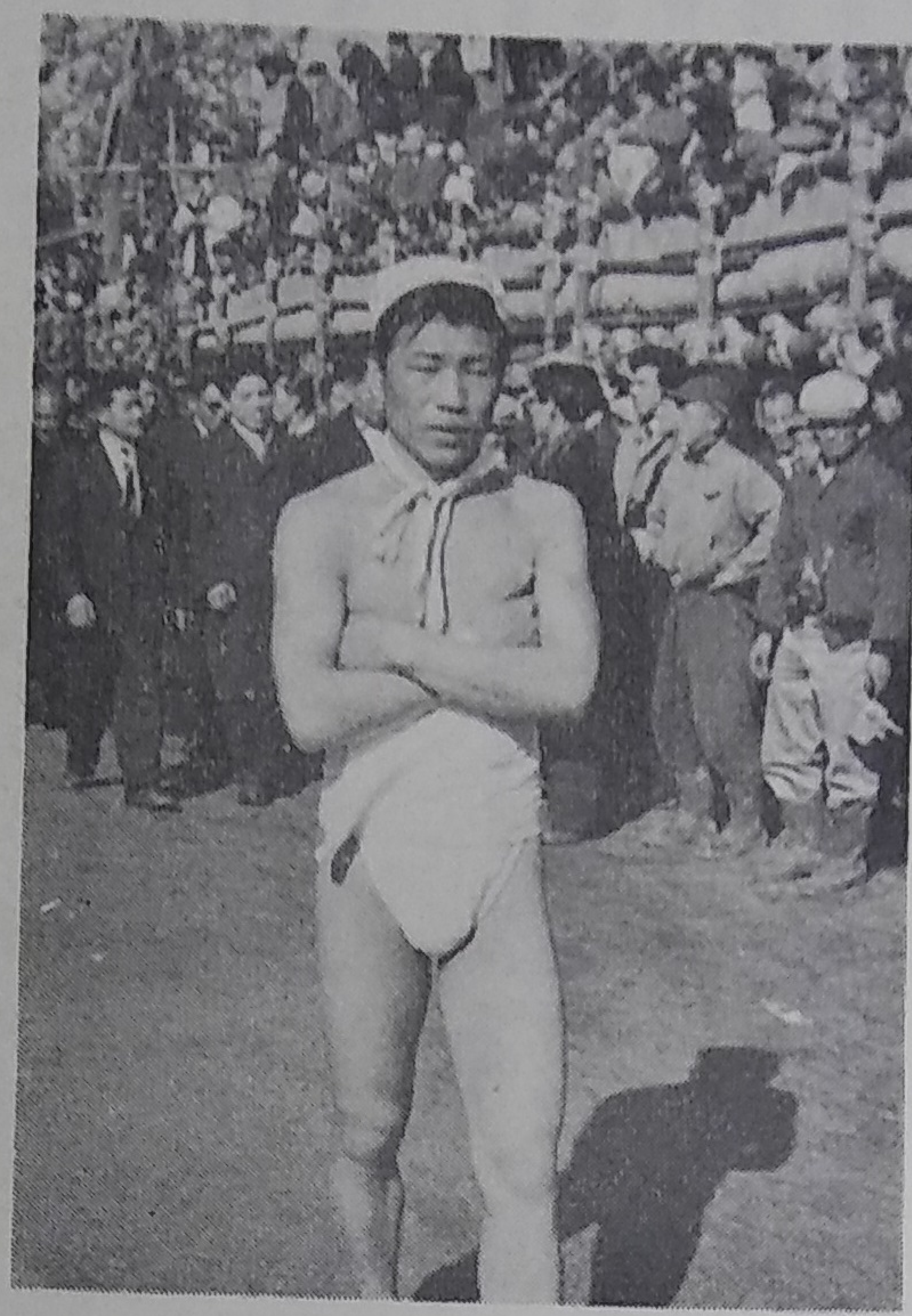
汝のたくましさに酔れようと
　二度三度すがれどもよれども
　私のこの快楽は燃えつきて後は
　　唯の汚灰も残さぬ惨めなむくろ
ふるい立たせ　心を一瞬の生命の輝きに
溢る　生ける意識の喜びに
　ひたらんと汝が　叢毛に唇を
　　埋むと云えど　忘却が瞬時を

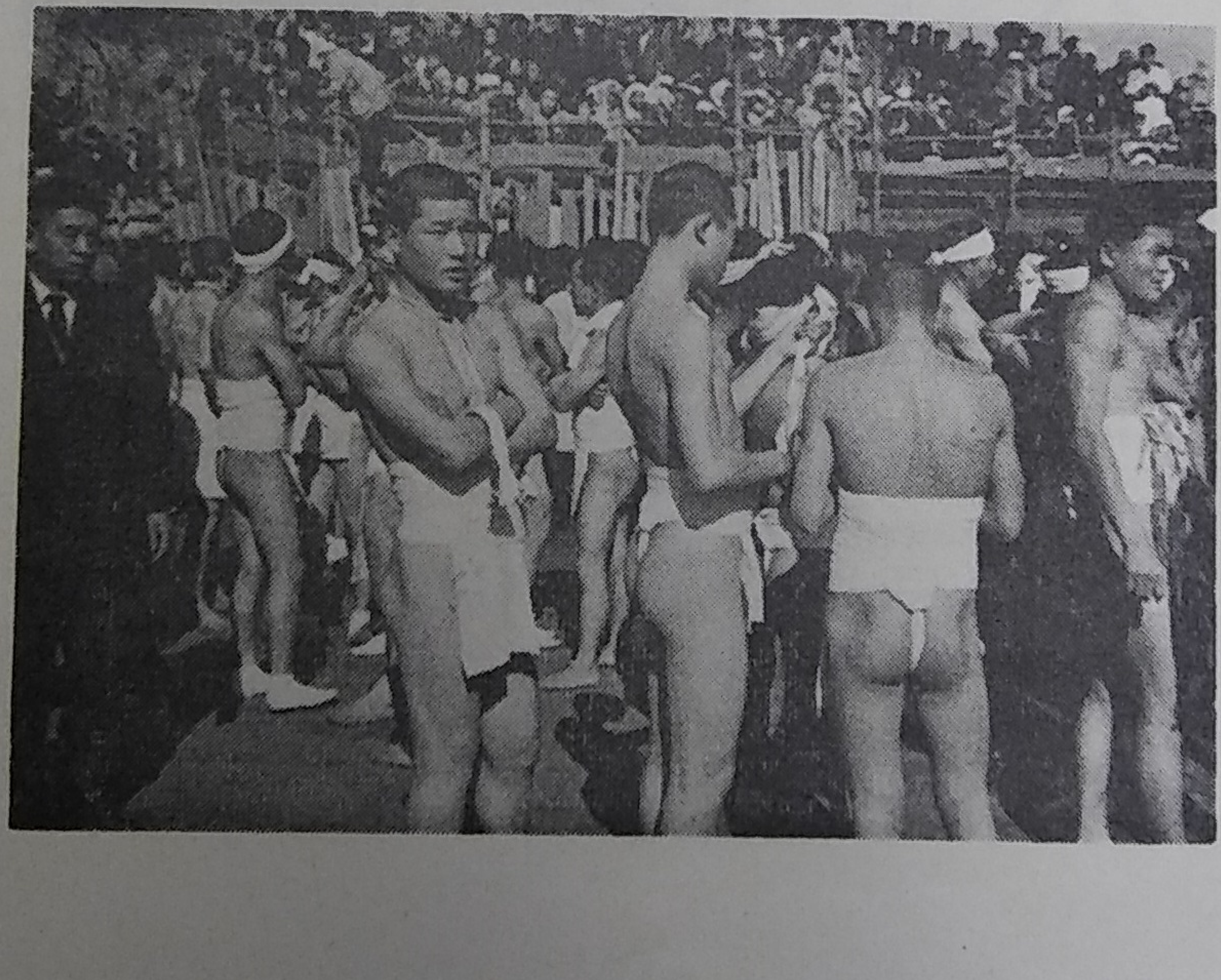
永却に変化せしめ
　静寂が汝の息吹きを吸い取つてしまう
想命は　空しい虚空の構図　赤裸な
　牙城となり果て快息の中の
静かなりつ動が地獄の哄笑とも聞えくる
そして明日ある私の生命は　新しい朝にめざめて
　忘却の彼方に消え去つた
凡てをふるいすてた姿で新たなる息吐きをはきつゞ
けてゆく



慕情　四〇八号

君をこがれてぞ
　涙は流離たるに
君が傍にありて　こぼつ我が涙の痛ましく
ひたすらに寄れる肌辺に
　君がむくつけき剛毛の千々に
　　我が心を貫きつつ砕かれたる姿のおかしけれ
無性にいとほしくて力張り握りしめ思いこむれども
　君がえまいの深くよどみて崩ることのあらねば
いらだつ心のおもむくままに流れける我が調べ
せめてこの一時の永遠なれかしとはさかしらだちし浅智慧
　君は我より引き出せしものすべてもてあそぶのみにて果
　　てては
新たなる快楽へと我を捨て去るなれ





君がみ胸にやすらわせたまえと望むばかりで
　いみじくもあわれなりと思わずや

君を想う時　我が心ちゞに乱れて
　自らもその果ても知られず
うたてなき涙の中に君を描きつ

君がたくましき力にかきいだかるる喜びに　四肢はふるえ
　我が生命はたけり狂うに　唯遠く
　君が面影を追うのみとは
世の理りのうぞましく身をうちてあらがいたきに
　身の心弱き性の如何ともなしがたきをうらむのみ

君が姿形の太々しきを我が眼は刻みもあえず
　我が掌に含まるるおぞうおぞうのふるえを思い返して
　一人ひねもす夜のふしどに我と我が指にて求むなれ
はかなき契りと云わむも生けとし生命の連なる限り
　君にこがるる心のたけびは常夜の世までも消えずなめ

詩「二人の地獄愛」

桂　七二三

㈠

オレがお前と会つたのは
拘置所つまり監獄さ、
お前は二十才を出たばかり
オレは四十五にちと近い。

○　○　○

オレは偶然お前の房と
一緒になつたあいさつに、
お前は「よろしく」と頭下げ
オレは何と云つたけ。

これが初めてお互いが
かわした会話の一節さ

＊　＊　＊

その夜はお前がこのオレの
今までのこと話しなと
せがまれ古傷痛み出す。

オレは不思議に二つだけ
コロシと強姦だけはしなかつた。
人をアヤめば罪重し、
女はオレには無用だよ。

お前はオレのこの話
信じられぬという顔で、
聞いていたけど本当さ
オレはうそなどつけない男
今に分かるよオレのこと。

＊　＊　＊

鉄の格子の部屋の中
囚人のにおいがする。
この中でオレが誕生して
オレの歴史がはじまつた。

母子二代のムショ暮し
生まれたときからムショ育ち。

＊　＊　＊

何処の誰かは知らないが
四十にして迷わすと、
しかしオレは十二才
何処かの国と同じ年。

＊　＊　＊

オレの初犯は十五才
罪名はピックポケットさ。
金持ちそうな貴婦人の
財布をしつけいしたまでは
よかつたけれどあと悪し
喜び勇む曲り角、
中身を出して空財布
捨てようとしたその手を
ぎゆつと握られ上向けば
サーベルつけた警官さ。

行きつく所は感化院
おりの中の生活よ。

＊　＊　＊

二犯三犯重ねゆき
オレが二十才の春四月
はじめて知つた性愛は
男と男のチャンポンさ。

オレ達看守の目を盗み

舌にゆだねる桃源境

歪められゆくSEXは
男の城のそのためか

＊　＊　＊

オレがお前と会つたとき
ほれてしまつた何となく、
くすぐるような臍三寸
ハートも激しく動いたぜ。

しかしオレは根つからの
同性愛者じやないんだぜ、
これでも女を知つている
身体なんだ不思議だろ。
今は男色から抜け出して
女の世界に戻られぬ、
男同志の味を知り
オレは一生男色党。

○　○　○

お前はオレの話を聞いていた、

（二）

次の日から作業して、
オレはお前と同じ場所、
座つて休みを憩うとき。

オレはお前の手を取ると
恥しそうな仕草して
払いのけたらまたオレが、
意地悪そうに手を握る
手と手がからんだラブシーン

そのとき看守が大声で
ぬかしよつた「作業開始」、
せつかくこつちが二人して
甘い気持に酔つてるに、
これじやムードが台なしさ。
気をつけるものだヘボ看守と
どなつてやりたい心地だが
こちらは虜の身の上さ、
勝手なことは言えねえが。

＊　＊　＊

格子の中の生活で
思うはシャバのことだけよ
今ごろ誰かどないして
歩いているかな繁華街、
思うと涙とどめなく
汚ない心を洗うよに。

＊　＊　＊

今度この門くぐらんと
心に決めて出所して、
だけど世間の風寒く
心の灯は消されゆき、
悪魔の声のみ闇にさゆ。

とうとう世間に背を向けた
信頼できるは同じ身と、
さとつたオレは刑務所を
わが家と思うようになつたのさ。

オレは伴侶を探してた
その時お前が現われて、
いつ[illegible]になつてくれ。

㈢

二人は静かに結ばれた
口は上衣の袖をかむ
歓喜の声をころすため。

最初は軽くふれあつて
それからあとは我忘れ
互の指は鍵盤の
上を強くまた弱く
早く、遅くはい回る。
快感は全身に伝わり、
五体の血は荒れ狂う、
その血もやがて一点に
快感は頂点に達したり
瞬間……陽水がピユッととんだ。
これからお前を「ヒロシ」と呼ぼう
オレは死ぬまで放さんぞ
絶対に放さんぞオレは、絶対に……

（ＦＩＮ）

「過去から未来へ」

七一五生

(八) ニューヨークを離れて

暗黒、そして冥府での夭逝した黙禱。
死者案内人の手袋は
皮製の注文品で　僕はともかくも
決して神を忘れたわけじやなかつた。
じつと息を詰め
復讐を誓つただけの僕だ。
夜、――
(1)ＳＯＤＯＭの街角、そして此世との訣別。
煙草の煙が結社を誘い
(2)ＢＡＲの燈りが舗道に零れたとすれば
それは追われて、僕等
(3)ＮＥＷＹＯＲＫ ＳＩＴＹ　に盲ら杖つく
親しい暖もりを包んだ震える
手に刻み込む皺。
二十Ｘ世紀の片田舎、――
聖書、そしてその(4)ＳＥＮＴＲＡＬ－ＰＡＲＫ　を通
り抜けた赤いランプの
背中に担ぐ燃えたつ劫火で
一行づつ焼き始めた、僕等に
(5)ＧＲＥＥＮＷＩＣＨ ＶＩＬＬＡＧＥの牧師け
愛想のいい　(6)ＭＯＮＳＴＥＲ　でしかない。
天上での運行、――
悪の華、そして悔恨のない背徳。
それから始めて　(7)ＴＩＭＥＳ ＳＱ　のネオンが
憶い出す喪われた呪いの光、僕等
まぶしくまばたいた　永い
永い蘇生への餞けの音楽。
契約の不履行、――
廃墟、そして爛れた死神との囁き、
(8)５ＴＨ ＡＶＥ・５７ＴＨ ＳＴ　に航海を締く、僕等
疲れた渡航者と　(9)ＳＡＩＬＯＲ　の　シーツに
しみ出す紋章は、神殿から拒否
された飾りない復讐と犠牲と
誇らかに罪を懲る　血の色だつたと
悟るがいい。主よ!?
神しろしめ給わざる群れ、――
(10)魔天楼、そして天に近い一隅での
愛の終り。
此の先　人間は哀しく

復讐を誓い[illegible]を知るがいい。

二人で、僕等

あとは彼奴を突き殺すのだ。

深夜の寝室は二時への傾斜、――

成就、そしてつまりそのあとでの

彼奴の記憶の厖大。

遂に陥ちた慣れ合いの沼で、僕等

救援者は既に彼ではない。

(11)GOD DAMN! 彼奴は忘れなかつたのだ。

沈黙、――

(12)BYE ,MY SAILOR, THE PILOT ON THE

OBSCURE BOAT。

BYE, ―― GOD。

(1)ソドム。 聖書によると同性愛の淫楽にふける此の街を

神が神火にて焼き滅ぼした。

(2)バア。

(3)ニューヨーク市。

(4)セントラル・パーク。 マンハッタン島の中央に在る公

園。

ーも多い。

(6)モンスター。 怪物、異形のもの、残忍な人などの意味。

(7)タイムス・スクウエアー。

(8)57通り5番街。

(9)水兵。

(10)有名なエンパイア・ステート・ビルの事。 私にはこの

時このアテジが一番自分にぴつたりしたので。

(11)ガッデン。 畜生！普通云われる嘲語ですが、私はゴッ

ド(神は)ダム(責める、呪う、呪い)の言葉にかけて

二義的に使用しました。即ち彼奴とは神といわれるもの

を指したわけです。

(12)サヨナラ、僕の水兵さん、幽冥から来たボートの水先案

内人さん。

サヨナラ ―― 神よ。

(九) ヨセミテパークにて

「過去から未来へ」

昔を振返えるそばから

積重なつて来たのは

忘れられていた年輪。

捨てたつもりの怪ものの血が
三十に近付いた僕の
壊れた道路を噛うのだ。
（今朝着いた
日本からの (1)AIR MAIL によれば
タクアンを送つたとの事。）

(2)YOSEMITE, WAWONA TREE
の下を抜けて
自分の年を逆算する。

●

これが二十代の旅かと
振返つた時、
僕の細胞が崩れ始めたとしたら？

●

(1)エアメール。
(2)ヨセミテ。　ワウオナにある巨木で、道路の真中にそびえているためこの木の下部をくり抜いて自動車が通り抜けられるようにしている。
その木のトンネルの高さが26フイートもある。

「過去から未来へ」
(十)　ホノルルにて

●

さて、と白い夏をめくり
こころに懸る言葉を
書こうとしたが………
また止める。

苦い煙草

逃げた言葉の裾に
人の愛しさを綴り込めた
象形文字があつたのに………。

今夜の海鳴りは
ふと昂まるSEXの
貌のない誰かへの思慕

白い頁にふきつける
苦い煙。

「過去から未来へ」

(廿)　ラスベガスにて

いつも死は
仕立おろしの流行服を
まとつた　浮気者。

僕が　(1)DESERT INN へ足を運ぶのは
(2)YOU，MR ALLIED TRICKSTER ！
死神の誘いが欲しいだけ●

そこで死は
賭を始めて
僕の心に射精するから。

(1)デザート・イン●　ラスベガスに在るホテルの名前で御存知の如く賭博場である。

(2)貴方サクラさん！。　普通の客のふりをしてサクラが何人か居る。

小学六年

若水泰

それは私が小学校六年生の春であつた。青く澄み渡つた空に、のどかな小鳥の歌がこだまする或る日の午后。日頃のうつとおしさから解放され、浩然の気を養いたいと考えたためであろうか。久し振りにS川堤に遊びに行つた時のことである。どちらかといえば内気で他の腕白連にまじつてワイワイさわぎまわることを知らなかつた私は、いつも年令不相応に大人びていた。ツツマシヤカに大気を胸一杯に吸い、さんさんと降つてくる日光に、心地良い汗を感じ閉じたまぶたの内に五色の虹を追つて、ウツラウツラしていたら突然横を走り通るあわただしい騒音に切角の夢を破られ、フット顔を上げてみると、可愛らしい少年が一人蝶を追つている姿が目に入つた●私より一つ二つ年下であろう。今になつても、その時の気持は表現できないのだが、

私は今迄見ていた楽しい夢の続きを追つているように、フラフラと立ち上り、その少年と一緒になつて蝶を追つた。

少年は一瞬驚ろいたらしく、目をみはつて私を見ていたが邪心のない私の気持が通じたのか、やがてそれにニツコリ

と笑顔でこたえてくれた。

幸か、不幸か、そのとき「ワーイ」「ワーイ」というかん声と共に寄つて来た五、六人の悪童連達によつて二人の笑顔は急に坐折を余儀なくされた。一番のガキ大将らしい出目金の悪童が顔中を口にして私達にそこを去れとどなりたてた。今ならば、さしずめ大外刈、或は体落しと行つた処であろうが、如何にせん、その当時、私は小心者であつたので満身に武者振いにあらざるふるえを感じつつ、すごすごと引き下がる他はなかつた。その時、意外にもその可愛らしい少年は突然悪童連達に猛然と口で反撃したのには悪童達以上に私の方がビックリした。私は大して風も吹いて来なかつたのに、その少年の体を風よけにしてかくれていたようだつた。少年は年下のくせに私など足もとにも及ばないぐらい、戦略戦術にたけていたのであろう。攻撃と引揚げのチャンスを心得ていて、言うだけ言うと、「帰ろう」とボンヤリしていた私をうながして先に立つて歩き始めた。逢うは別れのはじめであり、別れは逢うの始めとかいつ又、どこで逢わぬとも限らないと、後日再会のときのしかえしを恐れて、私は残念そうにどりまいていた悪童連に向つてキチンとおじぎをして来ることを決して忘れなかつた。

そこから三百米位行つた処に鉄筋コンクリートの立派な橋がある。その橋の附近迄来たとき、少年は、

「ちよつと小便する」

と、いいながら、そばの木の麓にむかつていきおいよく生理作用をはじめた。私はそれを待つ間に真似るわけでもなかつたが、やはり生理的要求に見舞われて彼に背を向けると、反対側の木の陰で小便をした。

「やあ、もうむけてるじやないか」

いつの間にきたのか、少年は私の後から私の性器をのぞき込んでいたのにはひどくびつくりした。しかけた小便もとまらぬままだつたが私は恥しさのあまり、いそいで性器をズボンの中にひつこめた。真赤になつている私に、

「恥かしいことなんかないさ、僕だつてたてれば大人みたいに全部むけちやうぜ」

と、ちつとも不自然でない明るい笑顔をみせ、ハンカチでよごれた私のズボンの前をふいてくれた。

「すつかり小便しちやいなよ、橋の下で僕のチンポもみせてやるから」

彼はそういつて私をうながすと、どんどん橋の下へかけ下りて行つた。私が行くと、人目につかない柱の陰のところで彼はズボンのボタンをはずしてチンポをひき出し、先をむいて見せてくれた。よく見ると恥毛もほんの二、三本だつたけれど生えていた。

「さわってごらんよ」

彼は少しも恥かしがらずに私の手をとってさわらせてくれたが、他人の性器にふれることははじめてだった私は又々今度は武者振いならぬ、恐怖のふるえならぬ、或る種のふるえに見舞われていた。彼のチンポは私の手の中でみるみるうちに堅く勃起した。

「マスしっているかい？」

少年はさすがテレくさそうにそう聞いた。私はとっくに、そのマスカキの愛好者であったくせに、その時「いいや」と、かぶりをふってみせた。むこうが、こんなにまで恥かしさをすてているのに対し、私はそういう時でさえしゅう恥のベールをぬぎ捨てることのできない性格であったようだ。

「こうしてやるんだよ」

少年はむしろ自慢げに何のくったくもなく、両手でその陰ケイをはさむと、錐をもむようにしてマスターベーションをやりだした。私はたかなる胸をおさえ、気も遠くなる思いでそれをながめていた。やがて● そのチンポの先からピュッ ピュッ、といきおいよく白濁したツユをとばし若草の上に、そのネットリした液体をたれさせた。私にもやってやるというけれど私はそれを頑強にこばみ、彼と別れかまるでわからないほど興奮していた。

それから心楽しからざる幾月かが流れた。せめてあのとき彼の名前だけでも聞いておけばよかったと、しきりに悔いられた。

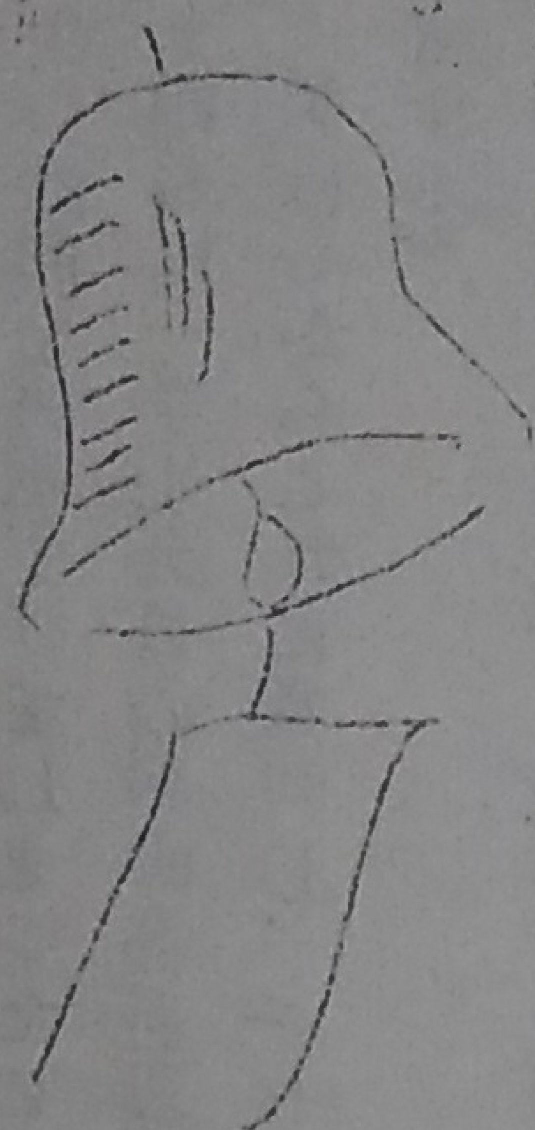
紅葉が一枚一枚地上に姿を消す肌寒い頃になって私に偶然がおとずれた。〃事実は小説よりも奇なり〃と、先人は云ったが、その奇が私にもやってきたのである。私が使いで街に出た時、いままで夢にまでもえがいていたその少年に再会した。激しい胸のこどうをおさえて聞けば、少年の父は税務署に勤めているが、今度T市に転勤することとなり、今日の終列車で出発するのだという。あまりにも冷酷な神の審判に私はしばし云うべき言葉を知らなかった。できることなら見送りだけでも、と考えてみたがそれも不可能なことである。私の心中を察してか、少年はあのときと同じ、あの可愛らしい笑顔をむけながら、

「チョットこっちえ」

と、家と家とのせまい路地に私をさそうと、私の体を抱くようにして立ったまますばやく口づけをして来た。なまあたたかい彼の舌が私の口の中に入り、少年の呼吸が直接私の鼻に伝わってきたとき、私は夢をみているのではないかとさえ疑った。人が来るので長いことそんなかっこうでい

歩きながら切ない思いで、ごくありふれた話をし、又少年の名前さえ聞き得ずして別れた。いつまでも後姿を見送つていた私とは対照的に、少年は一度も振り返つてさえくれず、F通りをまがつて見えなくなつてしまつた。

以来、勿論その少年には逢わない。今でも春になり、野に蝶を見る頃になると、あの少年のことを思い出す。ほろ苦い思い出！として。



裸体美礼讃

絵画部の新設に賛同する

六八七生

僕は男性の裸体にあこがれている。否とりつかれているのかも知れない。水泳は下手なのだが海水浴にはよく行く、枚男性の裸体を見るために！ そして若者の海水パンツの姿をじつとみつめている。若者の視線が合つてビク！とすることもしばしばだが、僕の性向はそんなことかまつて居られないのである。

引きしまつた腰、すんなりとのびた四肢、しかも発育した肉体は海水パンツをむつくりと盛りあげている。……アア……何というなやましい姿態であろうか。そして海水パンツの中に包まれた肉体を想像しては、僕の海水パンツもいやがうえにも盛り上り、完全にエレクトしてしまうのである。

僕は学生時代、学生寮にはいつていたが、同室の上級生に強制され、数人の上級生の監視する中で裸にされた。最後のサルマタをぬがされる恥しさは例えようもないが、何とも云えぬ快感を覚えエレクトしてしまつた。上級生は交互に僕の肉体を喜び、押えつけて射精させられたことがある

又僕も上級生に進むにつれて下級生を友人とともに裸にし発育途上の裸体を観賞し、喜び、愛撫したものである。
そしてこれらの経験は今もなおよみがえつて、僕の男体への執着となり、一生の性向を決定ずけてしまつたのだ。
会誌「同好」の才十四号に一学生会員の絵画部新設の希望がのせられている。僕は心からこれに賛同し、一日も早く実現することを切望する。
うすいサルマタ一枚でモデル台に立つ青年、これをデッサンする参加会員。会員の希望でサルマタもぬぐモデル会員……しゆう恥と歓喜でエレクトしたモデルは「僕のペニスこの通りムケています、そしてこの通り立派になりました、会員の皆さん、よく見て下さい。そして写生して下さい、かわいがつて下さい」といわんばかりに全身をさらす、デッサンする会員も見る見る陶酔して共にエレクトしてしまうのであろう。
モデルを希望する会員も相当あるであろうが、もし無い時は参加会員が指名してモデルにすればよいと思う。兄弟同様の会員だから共に裸になつて、すべてをさらけ出して楽しみたいものである。
なお、学生会員の方と御交際願えれば僕の最大の幸福である。

〝GAY〟

桂美男

(一)

地下のゲイバーとして有名な〝こまどり〟に行つたのは週末の土曜日であつた。休みの前の日のため客がたてこんでいると思つたが案外すいており静かであつた。階段を降りるにしたがつて、甘いゲイバー独特の香りが、鼻こうをくすぐる。スイートな音楽が耳を快く打つ、やがて音楽が大きく聞こえ、地下室の楽園に来た。いらつしやいませと威勢のよい声で迎えられた。赤や黄色の原色系統の多い、ドレスを着た者や、着物姿の者や、細身のズボンにまつ白なセーターを着た者もいた。六、七人の色とりどりの女装のボーイがいた。
中はピンクムードで、天井から小さなミラーボールが廻わつている。三人よればのたとえ通り、かしましかつた。ペチヤクチヤとあれほど口がまわるものだとあきれるぐらい動かしている。話題といえば恋愛のこと、他人のうわさ話、自まん話など、ごくありふれた女の話題であつた。入るなりさあどうぞとテーブルの前に坐らされた。ふわふわとし

たソファーである。オシボリがもつてこられて手をふく。

自分を最初に迎えてくれたコが、

「おビールかドリンクス、それともジュース、どれにしましよう？」

「ビールがいい」

彼の他に客は二、三人程しかいないらしく、手持ち無沙汰の様子であつたのか、レコードにあわせてチャチャチャやマンボを、自分らでおどつていた。おどる度に衣装が舞う、すそが乱れる。激しい運動のくり返すおどりほど、なまめかしく美しかつた。ビールが運ばれてきて、先程のコが横についた。ビールはコップに注がれていつた。

「わたし恵子です。どうかよろしく」

「いいえ、こちらこそ」

「このお店、はじめてでしよう？」

「うん、今日がはじめてだけど、感じのよいバーですね」

「そうですか、皆さんシックなムードがあるつておつしやいますわ」

「恵子さんですか、いい名前ですよ」

「ありがとうございます」

「まあ一杯のみなさいよ、ぐつと」

「じやすみません、いただきます」

「君の飲みつぷり、いかすな男性的で」

本当に彼の飲み方は、荒つぽかつたが、その中に何とも云えぬ魅力があつた。

「そうですか、しかしわたしは全然お酒の味は知りませんわ、本当云えば余りすきではないのです。嫌いなぐらいです」

「年令のこと聞いちや悪いと思うが、まだハイテーンぐらい」

「ええ、十八才です」

「十八才？　まだ若いですな」

「……」

「君の時分にはもう酒の味を知つていたな」

「セックスの味も知つていたんじやない」

「ハハハ、こら一本取られた。ぼくは完全に負けた。仲々面白いコだね君は」

「そうですか」

「そのとぼけるところが、また君の魅力のポイントになる」

「穴があつたら入りたいわ、ほんとうに」

「僕はね、家がうるさかつたんで、成年式が終るまで一滴も酒をのませて貰えなかつた」

「それだつたらよ、さつきの話矛盾しない」

「しかし、法律にも盲点がある如くハハハ」

「何かあるの」

「その通り、オヤジは子供にはうるさかつたけれど、自分は大酒のみだつたので、いつもでんと自室にコモ巻がおいてあつて、好きなときに飲めるようにしてある」

「朝寝、朝酒……じやない」

「だけど、朝だけはのまなかつた。」

「だつたら身上は安泰でしよう」

「君のウイット、面白いね」

二人は顔を見合わせて、笑いあつた。

「そこでオヤジの留守中に、ぬすみ酒をした」

「あなたつて不良だつたのね」

「それがまたオヤジが不思議で、僕が物心ついてからずつと酒のシヤクをさせた」

「へえ、あなたが」

「何もびつくりすることあないでしよう」

彼はセリフを云う調子で云つた。

「だつて考えられないもの」

「今、思うにオヤジもこの道の人間だつたのかもしれないと、考えるのだけれど……」

「ゲイの社会の人、わたしもそう考えていたの、そんな気がするわ」

「どうして」

うの、たとえ奥さんがブスでも」

「ふん、ふん」

「それにあなたが物心ついてからというのも変じやない」

「君の推理、理論的だね」

「そうでしようか、あなたのパパさん、中学校時代に、同年か年下か年長者か知らないけれど、誰か好きになられたのじやない」

「そうかもしれんな」

「昔を思い出して、あなたに対象を求めておられたのよきつと」

「オヤジにも、そういつた時期があつたのかと思うと、くすぐつたくなる」

「こんな話、直接にはお聞きになつていないと思うけど、間接的に言われたことない？」

「そうだね高校に入学したときに、オヤジの前に呼ばれて友達はよいものを選ばなだめだ、お前が大きく成長するかしないか、交際する相手の人物にかかつている、とこれが僕に対するお祝いの言葉だつた」

「そこに問題を解く鍵があるんじやない？」

ここまで話したとき、新しい客が二人入つてきた。それらの人達はこの店のこんいの客らしく、恵子があいさつして

春子さん、まり子さんらが彼にあいさつするべく傍にきた

しばらくしてまた恵子が戻ってきた。

「さつきの話の続きだけど、あなたのパパつて、少年時代美しかつた」

「まあ、子供の口からいうのも変だが、男性的なマスクなもつていたように思う、昔の写真みたらね」

「この道の人はすごく男性的な人か、なよなよした女性的な人に多いんじやない」

「そしたらオヤジにも資格がある」

「あるかどうか知らないけれど、ここへ遊びに来るお客から推してよ」

「こういうこと遺伝するのかな、僕も男性が好きだなあ、全然女性が嫌いじやないけど」

「どういうところにひかれるの、男性の」

「僕のホモ観は肉体より精神を主にするということ、結論から先に云えば」

「わたしも同じ考え方を持つ者ですわ」

「そうですか、賛同者がいたとは、握手をしましよう、握手を」

彼は少なからず感激して、顔を紅潮させた。

酒の酔いも手伝つて顔はいよいよ赤くなつた。

手をかたくにぎりあつた。

「普通の同性愛者だつたら、肉体とすぐ結びついて、精神的なつきあいをすることがないでしよう、それがぼくいやなんだ」

「そうね、何か不潔に感じるわ」

「そんな浅はかな気持のつきあいなら、はじめからしない方がいいと思う」

「お互いに損よ、気まずい思いするだけ」

「そう、だから二つの心が平行線をたどつているときは、どちらも手を出さない」

「わかる、貴方の気持」

「セックス才一主義では、男対男の関係は少なくとも成立しないと思う」

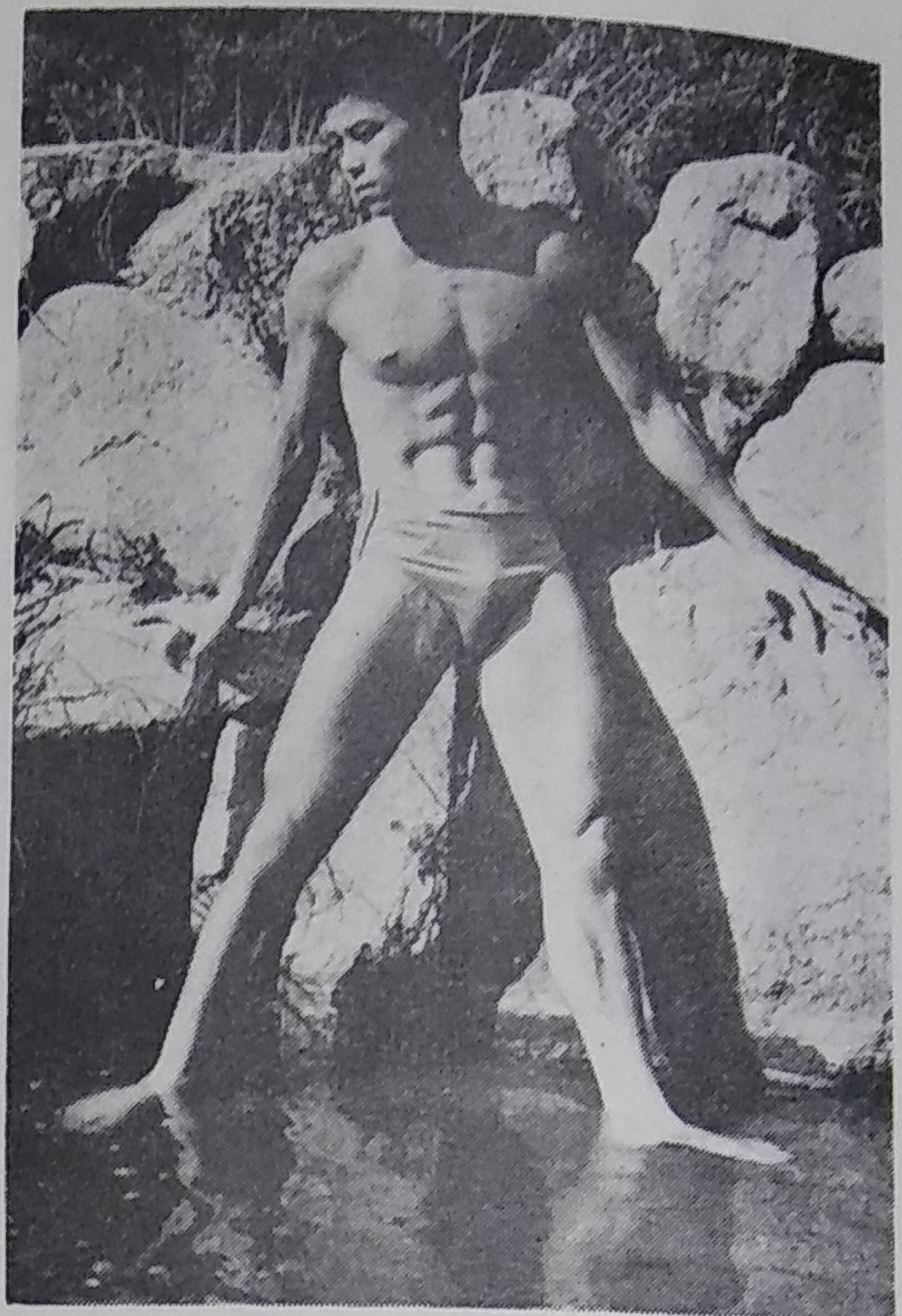
「何処の馬の骨か知らんもの同志が、ただセックスを満足させるために、ホテルに行くということ、わたしこの人達の人生観を疑う」

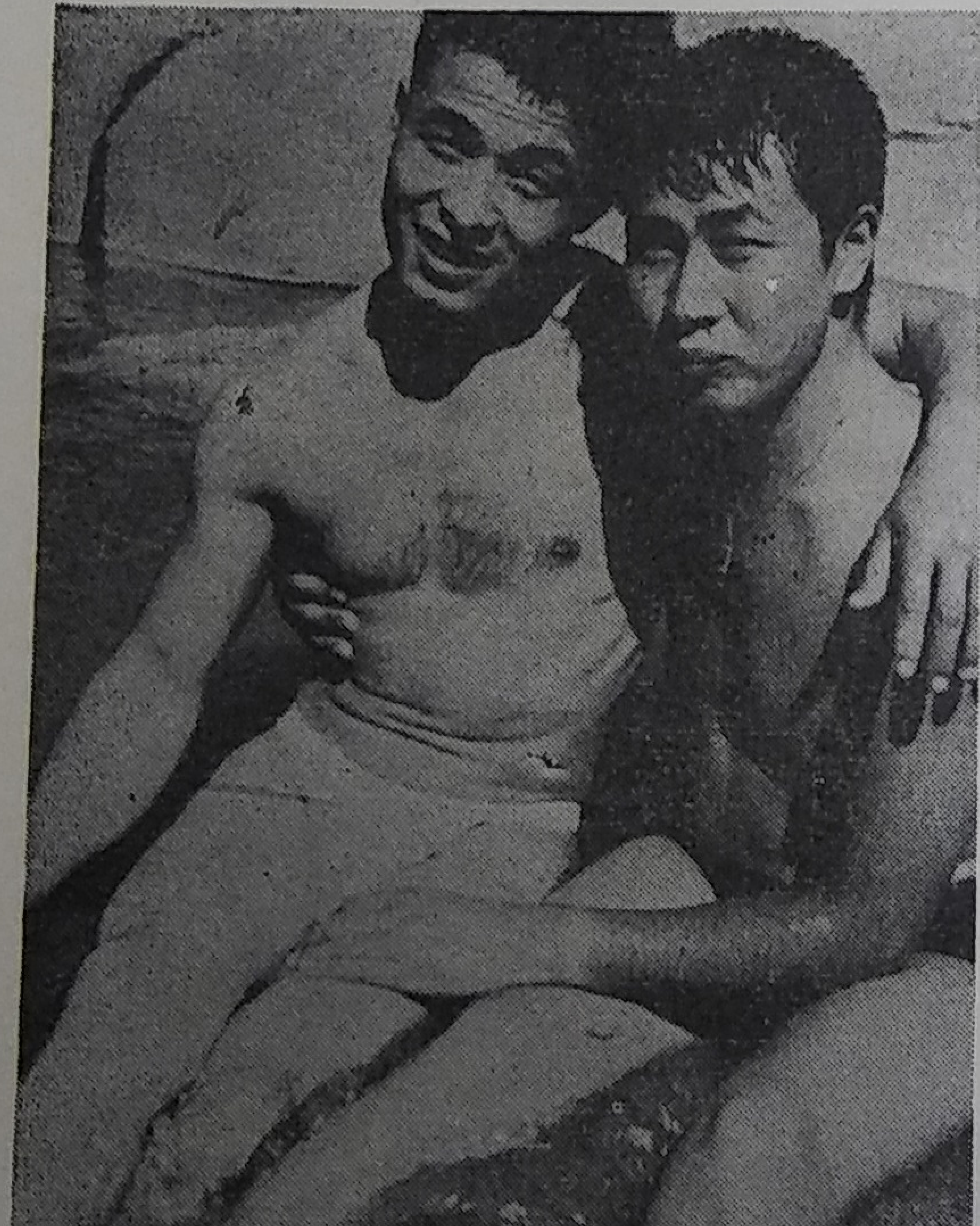
「こういうお店に居てもそう思う、君はえらいなあ、しつかりしている」

「えらいか、えらくないか知らないけど、わたしそう思うわ」

「それは経験からわりだした結論？」

「いいえ全然しらないわ本当に、女の方とも男の人とも経験したことないわ」





「本当に童貞？」

「ええ、神に誓つてもいいわ」

「そしたら君の理想論だね」

「うん、そうありたいと思つているのです。肉体は金で売買できることがあつても、精神いわゆる心はいくらマネーをつまれても、売れないし、また買えるもんじゃないと思う」

「売春婦の気持、わかるような気がする」

「生活の糧に肉体を売つていても、心までは売れないとする気持でしょう、わたし解る」

「オヤジの話じゃないけど、友達はよく選ばなければならないと思う」

「すぐに良いとこも、悪いとこも感化されるからじゃない」

「うん、だからつきあう人間が悪ければ悪くなり、また良ければ良化するし、自然に相手の性質まで自分の心の中に入りこむ」

「おかしなものね、友達つて」

「だから、自分の人生にプラスとなる友人なら一人でもよいが、マイナスになる友達なら何十人あつても、いない方がよい」

「もし仮によ、二人の世界を平和に築こうとするには、お互いが信じ合い、助け合つてゆかなければ……。男女のノーマルな社会でも、ゲイの社会でも同じだと思うわ」

「それが人間的な交際だと思うね」

「早々とセックスのみを追いかけて行かなくても、二つの心が相入れるときまで待つたらこれから一体誰と交際するか分らないけど、忍耐強い人と交際したい」

「そういう分別のある人とつき合つたら、幸福やし永遠に心の絆は切れないと思う」

「この考え方、甘く乳くさいでしょうか」

「ううん、君の思想は堅実だね、汚れを知らない者が持つ新鮮な考え方だよ」

「しかしこの道の人はあきつぽいでしょう」

「ハハハ、それが同性愛者共通の欠点だな、習性といおうか否定できないよ」

「何故そうなるのか、わたし知らないわ」

「僕もはつきりした原因は知らないが、こういうことは云えると思う。それはセックスを重点におくから、心とのアンバランスのために虚しさを感じちやう。特に交合の後は。それからセックスはスピリットほど多元的でないということと、云い換えれば深さというものがない、だから最初は物珍しさで楽しむが、最後にはあいてくる。するとまた目先の変わつたものを求める。この循環がくりかえされて、同性愛者の習性となるのではないかな」

「それは二人の心がぴつたりとあつてないからじゃない、だからよ例えば会つてから五日も十日も経つていて、電話も手紙も来ないとあれば、あいつ外で浮気していやがると思つて、自分も浮気するんじゃない。それとも、浮気性は先天的なものなんでしょうか」

「何かしらないが、とにかく浮気つぽいということは言える、事実なんだから」

「恋愛つて、淀の川の流れる如く、波間にまかせているのが一ばんいいんじゃない、お互いに強制しないと言うこと」

「それが普通の形だね恋愛の、ゲイ・ソサエティーでもそれが言える」

「わたしは深いこと知らないけれど」

「清潔な恋愛観だね君のは、性格も分るよ」

「こわいみたい、心霊術でもやつてんじゃなくつて、フフ」

恵子は肩をすぼめて、いたずらつぽく笑つた。

どこまでも愛らしい笑いだつた。魅力ある黒い瞳をくるくるまわしてはしやぐ、天真ランマンの一語につきた。ビールはむなしくなつていたが、コップには注いだままのビールがテーブルに、口もつけずにおいてあつた。それほど話に熱中していたのだつた。彼女?が、化粧を直してくるといつて席をたつた。入れ変りにマスターが傍にやつてきて

「よくいらつしやいましたね、あのコと何をお話になつておられたのですか、仲々頭のキレるよいコでしょう」

「本当ですね、しつかりとしていて、話のしどたえが有りますよ」

「そうでしょう、この種の店では珍しいですよ、あんなコは」

「えらいホメておられますね」

「ほめているんじゃないけど……」

あとは笑いでごまかした。その笑いからおしてこのマスターが、自分の店にもこんなよいコがいるのだと、自まんしたかつたのだと思われる。そんな単純な心使いのようだつた。彼が恵子を好きかどうかは知る由もないが、おそらく客観的にものを見たときの表現のように感じられる。主観が入つていれば、表現方法がもつと変わつたろうに思われる。

「反面ある種の冷たさがあるというお客さまがいらつしやいますよ」

「ああ、そうですかね」

そういつたことは考えられないといつた表情で、マスターの顔をみた。

「愛きようもあり、ウイットもある、面白いコだと思うのですがね」

「そういつていただけるお客さまも居られることは居られ

るのですが、少ないですね」

「何故でしょうかね」

「さあ、すきのないコなので、息苦しくなつていやがるのでしょう、お客さまは」

「ここに来る客は、息抜きとウツ積せるセックスを発散するべく、来るのですからね」

「そうですよ、だから困るのです」

さも困つたという様な話し方ではあつたが、表情には困惑の色が一つもなかつた。

「下卑な話をしたり、いやらしいことをするお客さまにはいやがつて、口実をつけてはにげだすのですよ」

「……………」

「しかし、あのコの誠実で純な心が、私をして怒らせないのですよ」

最後の部分は自分に云い聞かせる、ひびきを持つていた。

「確かにそういつたところがありますね」

とそこで気の抜けたビールをぐつと飲んだ。

「それに、天は二物を与えずという格言がありますが、恵子さんだけには当てはまらないですね、改めないと駄目ですよ」

「顔は美しいし、頭は切れるし、申し分ないと思うのですがね、人間だから……」

「欠点があるのですよ、気位いが高いのです、ちよつと、だから一般受けはしないのです」

「僕はそう思わないな」

強く言いはなつたので、マスターはびつくりして彼の表情を追つていた。

「それは貴男が、彼を好きになり始めたのではないでしょうか」

彼はハツとした。脳天に鉄板が落ちて来たのではないかと思つたくらい驚いた。客観性を欠いた言葉だつたと、云つてから気がついた。こら見破られるか知れんぞと思つていた最中だつたので、よけいにびつくりした。マスターのケイ眼は見事であつた。何も彼は恵子が好きでも何でもなかつたが、無意識のうちに弁護をした形になつてしまつたのだ。主観が入つてしまつたと自分でも知つている。

「僕の話とあのコの話とが偶然にあつただけで、好感が持てるとだけ言つときましょう」

「そうですか、どうも軽はずみなこと言つてしまつて失礼しました」

「いいえ、しかしたまには、恵子さんみたいな意気地のあ

「ヌーベルバークゲイ版ですか、ハハハ」
「そうです。新しい波ですよ」
「この社会の国宝的存在ですな」
また二人は顔を見合わせて笑つた。
「話こんでしまつて、これで失礼します。ごゆつくりしていつて下さい」
「有り難う御ざいます」
マスターは行つてしまつた。ここに来てはじめて訪ずれる孤独のときであつた。今まで恵子と話し合つてきたことを思い返していた。
彼は自分の胸の中に、ほのかにかよう暖かいものを感じた。愛のようなものであつた。
成長して大きな愛となるまでには、まだ多くの時日をかけなければならないと思つた。いま、結晶の一部がココの声を上げた。それが実るか実らないかは、二つの心のともしびが真つ赤に燃えて、永久に消えることのない火となるとき、その愛の小枝に、可れんなハートの花がさく。忍耐とカン難と幾多の試練にかちぬいてきた、二人だけが知る結実の喜び、彼はここまで想像したとき、彼のところに恵子がもどつてきた。彼はビールをもつてくるように命じた。
今日、彼はムチヤクチヤによつて恵子に介抱させようと思つた。ビールの栓がとび泡が勢いよく流れ出た。ホツプのよくきいたビールは、かわいた口に気持ちがよかつた。コツプに写る自分の顔をみて、彼女？に介抱をさせるには、自分のその手段が余りにもいやらしく思えてしようがなかつた。神聖的な恵子の心の美しさを知つている彼は自分の醜態を見せたくないという、心の動きもあつてそれを止めさせたのだ。
ここへ来て最初に見た時の感じと、今、化粧を直したあとの感じと、また趣きが違つている。衣裳は同じ白地に真つ赤な花があしらつてあるはでな着物であつたが。
「そんなにみつめちや、いや」
恵子がはじめて使つた甘え言葉であつた。
「美しい、本当に美しい。未来を思わせる美しさを持つた顔」
「神秘的な表現ね、三文小説にでて来ないセリフ、貴男があみだしたセリフね」
「キザになつたかい」
「いいえちつとも、それより未来という言葉のニュアンスわたし好きなの。丁度、一人で月世界を散歩しているような感じで……」
「君は文学が好きだね、読書をよくするね」
「ええ、好きです。読書もするわ」
「やつぱり。日本文学ですか」

「ええ、やはり日本の作者の本が好き」

「例えば三島さんの本とか……」

「……禁色でしょう読みました」

「主人公の生き方については？」

「たとえ小説の上とはいえ、人の生き方に興味をもたないというより、傍観する主義なのです。しかし客観的に物をみようとしても、つい主人公の生き方に賛成しちゃう場合もあるです。その小説に感銘したときは」

「そういうことはあるな」

彼は美しい恵子の顔をみた。若々しい匂いのする皮膚であつた。彼の胸によぎつたもの、それはある本に出ていた一節であつた。要点は女装の男子を愛の対象とする者は本当の意味のホモ者ではない。という論旨であつた。しかし、これはヘリクツと言うものであろう。女装愛好者も同性愛者の一員であり、我々と同じ宿命をせおつて、生まれてきたのである。女性嫌悪がこうじて、その人達の考えている女性像も自分等で再現しようとする心が、女装愛好者の心理だと思う。これもホモの一課程であろう。同じゲイという名の社会に住むものが、そんなこと云うのはおかしいと思う。自分が美しく感じたものと、恋愛をしたらいいのじゃないか、どれがどうのということないと思う。対象がそ[illegible]

だろうか、何処の社会でも、排他的な言動はつつしまねばならない。と思つた。

「わたしが今まで読んだ中で、一番感銘を受けたのは〃天の夕顔〃でした。」

「僕も読んで知つている。一人の男性が一人の女性を最後まで思慕してやまない。そしてその人が死んだとわかると、夕顔の好きだつた彼女を思い出して、夕顔の花火を作らせ、自分の心を天に通じよと打上げる。美しい余韻を残して終つていた。」

「わたし、その美しい心根が好きなのです。世をあげてビート族とかいつて、セックスの交わりを主においた現代では、無理かと思いますが精神誠意彼女につくした心が・・・」

「ゲイの交際もそこまで精神が浄化されていると、発展するよ」

「しかし、夢物語ね」

「おそらくそうだろう、現状では」

「わたし思うにね、肉の交わりを遊びなんだと、ドライに割りきつてしまえる人なら、まだ救われる道があるでしょう。しかしよ、物事をすぱすぱと割りきることのできない人は、段々と焦躁感が高まるばかりで、強いノイローゼになるでしょうね」

「まじめからそんなに割りきれるものじゃなし、人間の性

「誰もが一度は経験するのね」

「そうだよ、この道に足をふみ入れたら、遅かれ早かれぶつかる厚い壁」

「この壁を早く乗り越えた者が、結局ドライに割りきれるのね、あせるでしょうね」

「このあせりがよき親友より、セックスの求めあう友達を要求させるのじゃないか」

「純粋な心の人も、やがてその心の空しさをさとつて、だんだんとドライになつて行くのね、わたし年だけはとりたくない」

といや気を顔にみなぎらせながら言つた。

「その性の友がほしいなと思う気持が、表情にあらわれてゲイ独特のタイプが作り上げられて行くのだね」

「そんなタイプつてあるの、私みたいなの」

「どうて、見せることもできないし、言うこともできない。それには具体性がないから。一種のカンで分るのだよ、電車にのつてあれとあれが、そうだなあと分る」

「貴男つてすごいのね、わたし全然わかんないわ、世間知らずでしょう」

「これを裏返せば、こちらもゲイのセンスを身につけてしまつている、ということにほかならない」

「わたしが見る範囲では貴男は普通の青年だと思うわ、そんな体臭は感じないわ」

「有難う、なるべくゲイセンスを身につけないように、気をつけるよ」

彼は本当に思つた。恵子がどういうつもりでいつたのか、ただ外交辞令で言つたのか、どちらでもよかつた。そう言つてもらうのが、彼の心を明かるくするのだつた。

「強いていえば、じめじめとした梅雨どきの湿めつた暗さを身につけてしまつたという表現がぴつたりするのではないか」

「それに何かに、いつも脅えていらつしやる」

「それは自分の性向の秘密を、他人に知つてもらいたくない心の動きが、そうさせるのじゃないか、そう思うな」

「それがいつ誰に、見破られるかもしれないのじゃない？」

「それもある。それに欲求不満から健康そうな表情になれない。いつも何かを乞い求めている顔になる。それが……」

「それが貴男の云う、ゲイのセンスを持つた姿態というの、これから私注意して歩くわ」

ゲイの道に足をふみいれるとき、自分が男性しか愛することかできないと知つたときの驚きは、筆舌につきぬものがある。それがために気の弱い者は、前途を悲観して自殺した例も彼は知つている。考えても考えつかない、自分の宿

命を何故自分一人にだけ負わなければならないのかと、一体前世でどんな極悪なことをしてきたというのか、神ならぬ身の上では知るすべもないが……。男性として生を受けてきて、女性を愛する —— 勿論肉欲的に —— ことができず、同じ性を持つた男性にセックスを感ずる特異体質というより、心の病気が自分に感染していると知つたときその苦しさは生ツメをはがされるような、神経にぐさりとつきささる痛さを持つものである。

「いやーねえ、考えれば考える程、悲観的になつちやつて本当にいやーねえ」

そう云つて恵子はビールをぐつと飲み干した。

「それを忘れたいがために、セックスの快感に身をほろぼせとばかり強いる」

「そうならざるを得ないでしょうね」

「ある者は、麻薬に逃避の道を求めて行つたものもあつたあわれの一言につきるね」

自チョウとも何ともつかぬ言い方であつた。

「そういつた経験がないので、詳しくは知らないわ、だけどいやだわ、そんな生き方つて」

「これが同性愛間においては、プラトニックなラブは存在しないと云われるゆえんなんだ」

「もつと美しく生きられないの」

「その答はノーだよ、残念ながら」

「…………」

「セックスの快感の中に身を引き入れているときはすべてのものを忘れて身をゆだねているが、いつたんその快感の嵐が通りすぎてしまつたあと、心の中に虚脱感が充満して自己嫌悪におちいつてしまう。相手か行きずりの名も知らぬ者との情交後は、すごい空しさを感ずる。一寸でも愛情を感じているものであれば、そう虚脱感は感ぜずに済むものなのに」

「行きずりの関係のとき一ばんすごい？」

「早く云えばみにくさだけが残り、もう二度とこういう関係をやめておこうと思つても妖しいセックスの誘惑には勝てず、ずるずると泥の中へと誘われる。ゲイの社会に入つたら二度ともどることのできないところ、泥の中にさく花の美しさを持つていて」

これから先、何年幾十年生きなければならないか、分らないけれど死ぬまで宿命という綱に身を絞られて、それと斗かつて行かねばならない。世間の人からはどう云われるか分らない。ののしられ、足げにされて何度悲憤の涙を流すかもしれないが、一致団結して、一般社会の人からうしろ指をさされることなく雄々しく生きて行きたいものだ。日本にも近い将来、同性愛党ができるかもしれないと思つた。

「砂漠のような、さらつとした同性愛を行なえる日か、早くきてほしいわ」

「僕の思うのに、我々かいまやつている性生活は当り前のことをやつていて、一つも恥じるところかないのだ。と思つて」

「そうは思うけど、頭つてそうきりかえられるものかしらすぐに」

「しかしそう思わにや、暗くなるばかりで」

「味気なくなるわね、同性愛つて」

「それを正当ずけるために、一般社会の夫婦のように、一人一人制をとつて、浮気は恥じよくの最たるものであると思いこませ、平和に楽しく一生を暮せたら、そういう社会になつたら同性愛者特有の浮気性も陰ウツ性も消散して、明かるいゲイ生活かできる」

「わかるわ、貴男の考え方」

「じめじめとした今までの暗い同性観を持つた者同志か交合したら、一体どういうことになるか火を見るより明らかでしように」

「暗くなるばかりね」

「こういつた暗さのない思想を、我々若い者が持つて、それを築いて行かねば、同性愛はいよいよ自からの手で、キユウ地に追いつめられてしまう、自殺行為である」

「とにかく現状維持ではだめだとは解るわ」

「砂漠のようなかわいた性生活をして、オレは楽しいんだと言つている人があれば、大分情操のない、粗野な人でしようね」

「まず精神の高揚を計らにやだめね」

「進歩しないよ絶対に。後退はすることがあつても、今のままでは。世間の人達からも理解されないし、破感の道を歩むだけと思う」

彼は自分の肝胆に命じるように云つた。時計をみた。針は鋭角に十一時四分を示していた。彼らか話しているうちにもレコードかマンボからチヤチヤチヤ、歌謡曲と変つてゆく。時が進むにつれて客も満足そうな顔をして、ボーイと話がついたのかどうかは知らないか、帰つてしまつた。さつきの二人の客も帰つたようで向こうのボツクスにその姿を見ない。黙つてきて、黙つて帰つていつた。暗い宿命を暗示するかのようであつた。

「もう十一時をすぎたんだね」

「じつきね、時間の経つのつて」

「長い間、話をしていたことになる。くだらぬ話をペチヤペチヤと、酒の酔いにまかせて勝手なことばかりしやべつて、聞きずらかつたでしよう、我なから恥しい」

「どういたしまして、面白かつたわ貴男のお話つて。わた

しは確固たる信念を持つた人大好き、思想の強固でない人嫌いなの」

「話をしていても面白くないから」

「それもあるけど、こちらの云つていることばかり、フンフンと云いながら聞いているの、人形みたいで……」

「腹がたつて？、それは君がえらいからだよ、そういう人間が馬鹿にみえる」

彼は本当にそう思つた。真実の言葉であつた。

「もう帰えるの、また来てね」

「うん、十一時五十分の終電にのるから」

彼は恵子におアイソをしてくれるように云つた。

「ありがとう御座居います。」

恵子は単語カードのようなものに書いてある数字を指し示した。23……と書いてあつた。

二千五百円を出しておつりはいらないと、彼は云つた。恵子の心と自分の心が、どうもある一点で交わるような気がした。昔の彼なら恵子と共に一夜の仮寝をしたであろう。

「本当に、今日は楽しかつた」

わたしも、と恵子も合槌を打つた。満足そうな顔をしていた。円満な表情であつた。

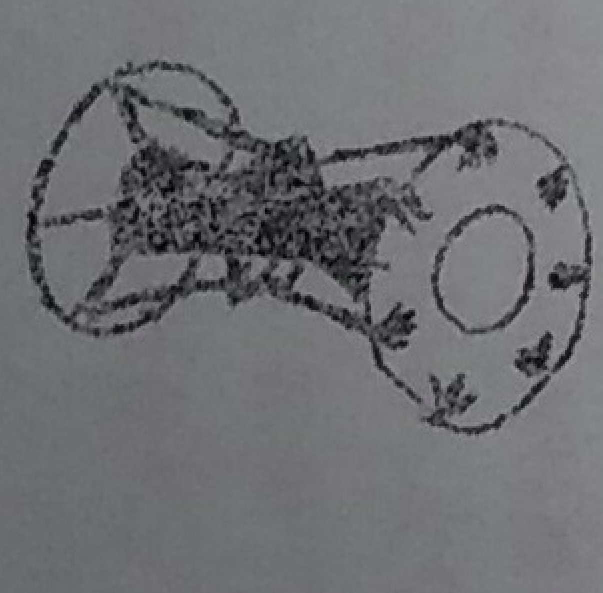
く燃えているのを知つている。

外に出れば秋風が酔つたほゝに気持がよかつた。遠くのネオン塔が空をこがしていた。向うの角まで送ると恵子はいう。握手してその町角で別れた。別れ際恵子は、

「今日もまた、アパートで一人さびしく寝るのよ、苦しいわ」

彼に求愛していることは分つていても、手を出せなかつた。家では妻が待つているのだ……

未完



いで湯の集い

報告記

奥丹地区の会員初顔合せ懇親会を、京都府下木津温泉　えびす屋旅館で、去る十一月五日午后七時より一泊翌六日午前までというスケジュールで開催した。

同地区の会員には全部通知を発送し、大阪地区の会員には事務所、バー蘭丸　にポスターを貼つて、通知に代えたのだつたか、相変らず同好者の性格の悪いくせで申込期日までに申込を受付けたもの僅かに十名だつたが、当日の参加者は丁度その倍数の二十名に達した。一寸足場の悪いせいもあつたが参加人数としては予想より少し下廻つた感じであるが、非常になごやかに愉快に懇親の実を挙げ得たことは誠に喜ばしい次才であります。

当日大阪地区よりの参加者六名は午后二時五分発の準急丹後に乗つて出発した。

土曜であることと行楽シーズンの為に車内は満員であつたがお互いに譲り合い親睦感のあふれる同好者の一連である丈に満員も余り苦にならず、可成り楽しい旅の車中でむつた。

途中綾部より会員が一名同乗され、同地名物のアユずしを御ちそうになつて、腹をこやし談笑の中に木津温泉より二つ手前の峰山駅にて下車し、綾部の二三四番会員の配慮によつておむかえの自動車が出て呉れており、早速これにて木津温泉　えびす屋旅館に伺う、道は可成り良い道であつたが距離は割合に遠い、かれこれ三〇分以上も走つて、やつとえびす屋旅館の玄関についたのはかれこれ七時前だつた、既に近くの会員さんが十名近くも集まつておられた、それに合流して、とたんに賑やかになつてきた。続いて又一人、二人と参加者も増加してきた。そして一同旅館のドテラに着換えて随時温泉にひたる、やつと八時前にこれで本日の列車の便も絶えたと思う頃に十九名が参集した。宴会は予定より一時間近くおくれて開宴された、着席順序は抽選で決定された為に非常にスムースに運んだ。先ず型の如く会の毛利が簡単な挨拶を為し、本会開催に御尽力を頂いた、五一七番会員に謝詞を述べて、いよいよ乾杯に入る安い会費にもかかわらず大変な御ちそうが出され歓談の中に杯がとび交う、この頃には一同が完全に解け合つて、実になごやかに近親感にあふれてほがらかに楽しいものだつた。

飲める人は飲み、食べる人は食べ、何のくつたくもないこの宴会、誰に気を使うこともない全部のノが理想にみえる

このなごやかさ、同好者同志が酒をくみ交す集いの楽しさおそらく我々でなければ味わえない、真に心の中よりの慰安である。一同逐時自己紹介がはじまり笑いの中に終る。

かくして凡そ二時間余り、ようようにして宴は終つた。

会員のうち五、六名は次の町にあるダンスホールへおどりにでかけた。これもダンスの教授をしておられる会員のお招きで好きな方丈がでかけて行つた、二台の車に分乗して暗い田舎の夜道を楽しく語り乍ら車をとばしていた。

網野の町にある唯一軒のダンスホールは土曜の晩であるので、土地の若い男女の人で可成りにぎわつていた、そこへ会員のダンスの先生が五、六名連れて、のりこんで来たので一段と活気ずいてきた。レコードは次から次へと休む暇なくかかつている。

実にみんな楽しそうにおどつている。我々も土地の娘さん達にプロポーズして、ジャンジャンおどる。やつと十一時を一寸過ぎた頃にラストとなつて、土地の人達は引あげて行つた。後に残つた我々会員の者六名は、同ホールの経営者の供応をうけて、オコタにはいつて、ビールの栓をぬく全然見ず知らずのこの土地へ来て、然も一銭のペイもなくおどり、又こうやつてそこの人達より御ちそうになる、我々は何という果報者であろう。十二時をすぎた頃に同じく二台のタクシーにのつて見送られながら辞去した。

旅館に帰つてきたら、まるで修学旅行生の宿の様に十畳の間を四つにずつと枕を並べて床が取られてある。その上にある人は座り又寝そべつて、盛んに面白おかしく談笑している、ここでも何時迄も話しはつきない。大阪からの人も京都市の人も鳥取より参加した人、又名古屋より来られた人、それに土地の人々たつた今まで一面識もなかつた人達ばかりなのに、既にこうして、こんなになごやかに親しみをもつて話し合えるなんて、全く不思議な様にさえ思える私はここに本会の意義があり、又会の行方がここを推しすすめて行く事に大きい利点を見出すのではないかとつくずく感じられた。

さあもう遅いから寝みましよう、誰からとなく声がかかつた。皆それぞれに一人一人床についた。そして各電気のスイッチが切られた。あたり一体はまつ暗闇、ただうつすらと外部のあかりが少し硝子障子越しに照らしている程度であつた。所々でかすかな寝息が聞えてくる。それはウメキとも泣いているともつかぬ声だつた。いや一箇所ではないあちらでもこちらでもまるで寝静まつた野原に秋の虫が泣きはじめたように幾つにも聞えて来る。そして私の感情もそれにつれてだんだん高ぶつて来る。プロレスのダック、マッチの様にタッチーして交替するのであろうか、この状景は可成り長い間つゞいていた、いや一晩中続いていたの

ではなかろうか。

私は異常に興奮してなかなかねむれなかった。けれどもいつの間にか赤子が泣きつかれてねむつてしまうように深いねむりに落ちていた。夜はすつかり明けた、人声に目を覚したら時計は七時頃だつた、昨夜の汚れを洗つて来たのかタオルを下げて温泉よりかえつてくる人、又出かける人、だんだんと騒々しさを増してくる。激戦の後のつかれか、まだすつぽりフトンを被つてねている人もいる。起きがけのタバコを吸いながら話しに花がさく、何の恥じらいもない、又わだかまりもない無邪気さ、そこえ女中が現われて朝食の用意をさせて頂きますと告げて来た。洗面に立つ人一風呂あびる人、まだねている人、八時過ぎ一同それぞれ朝食の卓につく、みんな満ち足りた様にはればれとした顔をしている、九時頃より一人去り二人去り互に名残りを惜しみつつ、その日の仕事の為に去つて行かれた。我々も最後に十時半頃の列車で半数程は豊岡方面に、半数程は橋立方面行にと両方のホームに別れて、同時刻に上下線とも、やつてきた列車にのりこんだ。

一行六名は橋立に途中下車して、天の橋立を見物して夕方の列車で帰阪した。

或る雨上りの夜

S H 生

もう五、六年も前になりますが。未だ私が母親と二人暮しの時で、比較的自由な日々を送つて居た頃でした。此の方面の事も、あの頃の「佐倉」「中島」などへ足繁く通い又友人なども多くあつて、いろいろと見聞をひろめ、自分ではいつぱし知つている者の様に思い込んで居た頃の事です。

其の頃は毎週日曜日と云うと午后からぶらりと家を出て映画でも見た後夕食をとつて、夜遅く帰宅するのが通例になつていました。

もうそろそろジャンバーの季節でしたから秋も少し深まりかけた頃だつたと思います。その日も丁度日曜日、そして朝からどんより曇つた空は昼頃になつて細い雨となり出しました。例によつて午后から家を出た私は、当ても無いままに道頓堀をブラつき、千日前に出たのはもうかれこれ五時過ぎ頃だつたでしょうか。十時頃の早昼に空腹を覚えた私は常盤座前の食堂に入り込みました。丼物を喰べ乍ら「さてこれから……」と考えましたか、別にこれと云つ

て見たい映画も無し、さてどうしたものか、と何気なしに窓硝子越しに外を見て、そうだあの映画館へ入ろう、と心につぶやきました。常盤座と駐在所の間にはさまれた小じんまりした映画館「千日会館」というあの映画館、というより「小屋」と云つた方が適切な感じのする建物です。数分後私は財布を手にその映画館の切符売場の前に立つていました。

雨の日曜日、そして此の時間に、場内は満員でした。扉を開けて中に入ると、私はすぐ左側に位置を決めました。暗闇に目がなれて来るに従つて周囲の人々の様子がおぼろげながら見えて来ます。と私の左後に若い男の子の姿を見つけました。私は後から入つてくる観客におされるのを利用して、その子に近ずいて行き、とうとうその子の斜前に位置することができました。少年は無心にスクリーンに目を投じて、周囲には全く無頓着の様子です。私は何気なく下に下げた左手を、少年の股間にふれました。ズボンの下に暖かいものが感じられます。少年は身動きもしません。指先を動かして掌の中に包み込み、指先にそつと力をこめます。然し尚何の反応もありません。がその中にそのやわらかい塊が次才に固くなつて行くのを感じ出しました。もう私の目はスクリーンに向いていても、内容など上の空です暫く掌にもてあそんだ後、私は少年の右手を求めて小指をその掌に握らせ、ぐつと一回引いて其のまま扉の外に出ました。果して少年が来て呉れるかどうか、私は賭をした思いで館をでると立ち止つて煙草に火をつけました。一服吸つて煙を吹き出す私の傍に、件の少年が黙つて立つのを見て、私はとたんにうれしくなつたのです。両人共黙じ合つたまま、既に雨の止んだ千日前の通りを歩き出しました。

雨上りの千日前は人出も割りに多く、雨に洗われたネオンはことさらに鮮かに夜の街を美しく彩つています。御堂筋にでた私達は「コロンボ」という喫茶店に入りました。テーブルについて、私は始めて少年に言葉をかけたのです。「君いくつ？」少年はうつむき勝ちに答えました。「十八です」年令を聞いて私の胸はいささか動悸をおぼえます。一度声をかけると後は割合にスラスラと言葉がでて、あれこれと話に花がさきます。黒い学生ズボンに濃茶のジャンバー、そして短くかりこんだ頭髪はその毛先が童顔の消えぬ額に垂れかかつています。つぶらな両の瞳、ちんまりと可愛い鼻の下に続いて、杏を思わせる唇があります。口数が少く、殆んど私の問いかけに対する簡単な返事以外には自分からしやべる事をしません。佐倉も中島も知らぬと云う此の少年に、私はすつかり気を許しました。「どう、これから僕といつしよに行きますか」と聞くと、「ええ」と別に厭でもなさそうな返事に、伝票を持つて席をたつと、

少年も後に従います。

「佐倉」も「中島」も行きたくなし、と考えていると、場所の選択にまよう私を見て、少年は「安い家を知っていますが……」と遠慮深げな声で云い出しました。「何処？遠いの？」「いえ、すぐそこです」「案内して呉れや」難波のロータリーを右へ折れると、細い露路を一、二回曲り、周囲を生垣で囲んだ素人家風な家の前に止りました。小さな看板に「旅館　○　○」と書いてあります。玄関を開けると三十がらみの割烹着をつけた女が迎え、部屋に案内してくれます。「おや、此の子割にオツな家を知ってるな」とは思いましたが別にとりたてて気にもかけず、六畳位の部屋に通りました。先刻の女が茶を運び直ぐに出て行つてしまうと、彼は少年と二人きりです。茶わんをぐつとかたむけると、私は上着をとりました。少年は後をみせながら既に上衣をとり、ズボンを脱ぎにかかつています。私もシャツを脱ぎます。そして、やがて二人はお互いに全裸の身体を見合いました。既に私のも、彼のも、完全に勃起して、興奮にふるえています。私は少年を抱きかかえました。少年は私の身体を受けて後の布団に仰向けに倒れます。激しい接吻、肌と肌がふれ合い、ペニスとペニスが互に怒り立つて、ことさらに慾情を誘います。少年の唇を吸い乍ら、私の手は少年の胸へ、可愛い乳豆を弄び、弾むような腹を撫でて、やがて静に忍び込みます。少年の手も静かに私の慾情へ……。私をそつと離すと、少年は私を仰向きに寝かせ腹の位置に坐りました。私がじつと寝ていますと少年は私のペニスを掌に軽く弄んで居ましたが、その中に私のペニスは生暖かさを感じました。閉じていた目をうすく開けて足許をみると、少年はその唇にペニスを含んで居るのです。舌先の微妙な動きにつれて、私は陶然として来ます。少年の位置を少し上にずらせると、私は少年のペニスを片手の掌にしつかり握りました。時々当る歯の刺激、次才に激興する慾情、そして遂に私はその慾情を弄らせました。射精の後の快い疲労感、しかし少年は手を休めようとはしませんでした。ぐつたりと萎えた私のものを、尚も弄んでいる中に、再び勢を増して来たと見ると、今度は自分が布団の上に仰向けに寝転ぶと、私の身体を自分の上に重ね、そのむつちりした太腿の間に、私の怒張したものをはさみ込み、べつとりと唾をぬりこみました。私は静かに腰を上下し出しました。二人の腹の間で少年のペニスがもまれます。静かな動きは、やがて激しさを増し、強く緊めつけと、肉の摩擦に、再び私はよろこびの絶頂に到達しました。再度の射精に、私は疲れを覚え、暫く横寝して居りました。横には少年の裸体が横倒つております。若さを誇る様なその肉体を、私は得難い物を見るような気持でなが

めて居りました。

やがて、少年は起き上るとシャツを取り上げました。私もパンツをはき、シャツを着ると、既に上衣を着ようとしている少年に向つて、「これからも交際しよう」と、名刺を差し出しました。少年は黙つてそれを受け取るとチラリと視線を走らせ、其のままポケットに収めました。充ち足りた気持で、その家の玄関を出た私は少年と肩を並べて歩きました。細い露路を出て、表通りに出ようとする時、始めて少年の方から言葉をかけて来ました。「どうでした？」「ウン、よかつた」「兄さん、悪いけどお小使い呉れませんか？」私はハツとしました。しかし、直ぐ「よし、ぢや」と財布から千円札を一枚とり出すと「これで良いだろう」と差し出しました。素人の子に余り多額の金を与えることは、かえつて好ましくないと考えたのですが、あいにくと少額の金を持たなかつたため、千円札を出したのです。ところが、少年の言葉は意外でした。「これだけ？」と、如何にも不服そうなのです。「まあ今夜はこれ丈にしてな、又あうこともあろうしさ」が少年はその金を渋々受取つた後、未だ不平を並べて居ります。もつと呉れというのです。私に身体をつける様にしながら「ねえ、これだけで僕を帰すなんてひどいよ、もつとあるんでしょう？、もう少し下さいよ」と千円札を差出した時、其のまま「さようなら」を云つて別れてしまえばよかつた、と思つても、既に相手のポケットには私の名刺がしまい込まれています。「おい、さつきの名刺返して呉れよ」と云つても後のまつり、私の弱味をつかんだ彼は名刺に手をふれようともしません。遂には「若し今呉れないなら、明日会社の方へ行くから、会社から金を借りて下さい」とまで云い出す仕末。気ずいた時は既におそかつた。少年は完全なプロだつたのです。会社になど来られたらどんなことになるか解りません。そして、それを一番の弱味と知つている彼は、知らないどころか、知りすぎています。何もかもを。此処まで来ては、もうのがれる術もない、私は財布を取り出すと、残つた二枚の千円札をぬき出して彼に渡すと、もう渡すものの全く無い事を示しました。然し、彼はなお依然として去ろうともしません。「もうそれだけやつたらよいだろうに」と云うと「でも、家に帰るのには、もうバスも電車も無いし、タクシーを拾わなければならない。タクシー代を欲しい」と云い出します。「然し、そんな事云つても、もう僕は財布の中には何も無いんだから」と申しますと、今度は私の家に来る、と云い出します。何とかして名刺を取り返して、とは思うのですが、為す術がありません。といつて何時までもこのまま街中を歩き廻る訳にも行かず、既に腕時計は十時をとつくに過ぎており、周囲の人影も疎らです。とも

かく、あと幾らでも渡せば、名刺を返してくれる、約束して、家路につきました。家に向つて歩く私のみじめな気持お察しいただけるでしょうか。

家では母親も幸い寝入つて居りました。物音をたてぬように、ヘソクリの千円札を机のひき出しから二枚ぬきとるとそつと玄関へもどりました。「さ、これでよいだろう」「ウン」と手を出す相手に、「名刺と交換だ」と告げると素直(?)に名刺を私の前に差出します。交換に札を渡しますと、枚数を数えてポケットにしまい乍ら、ニヤリと笑つて「有難う」そして私の手許を見ると、うすら笑いをうかべると「何も破る必要はないでしょうに」という。その言葉に気付いてみますと、私の掌には、細かに千切られた私の名刺が入つていました。

あまりのくやしさに、無意識のうちに返された名刺を破つていたのでした。そんな私をあざ笑うような笑顔を残して、彼、少年は寝静まつた夜ふけの街を、私の視界から去つていつたのでした。

今では、このような事も少い。いやほとんど無いと云つても良いと思いますが、これは私の失敗談、先ず先ずお気をつけ下さい。

プロもはだしで

S M 生

日曜日の午後三時頃、会の事務所は例の如く大勢の会員が集まつて来て、或る人は事務局備付けの単行本(ゲイ関係のもの数十冊ある)を読んでいる者、会誌を繰りひろげている者、雑談している者、ろう下の向いの部屋でも数人の少年がレコードをかけて、それに合して合唱したりして大いにはしやいでいる。

中心に座つている、事務局長兼務の毛利に話しかけたり、到来物のミカンやお菓子を前にして楽しく過していた時だつた。

ジリンジリンジリンと電話のベルが鳴つた。

すぐに毛利は受話器をとつた。

「ハイハイ」

「もしもし毛利さんですか?」

「そうです」

「僕、平田です」

「はいはい　判つています　平田さん」

「あの急ですけれども、お金五千円貸して頂けませんか」

「え、五千円」
「はい、そうです。どちらし[redacted]のです」
一寸声がふるえている[redacted]じられたので、ピンときた
毛利は
「今そこはどこですか」
「はい、南街の地下街の喫茶店ＢＸです」
「はい判りました あと一〇分位して再び電話をかけてからとりに来て下さい」
「すみませんか、それではどうぞお願い致します」
一寸声を落として、毛利は
「もしもし直ぐに行きますからね、心配せずに待つてなさい」
電話は切れた、直ちにその電話の内容が、事務局に集まつている会員に簡単に説明された。
「今、〇〇番会員の平田君より電話がかかつてきて、どうも地下ニュースでプロにひつかかつて、強迫されているらしい。
僕にお金を五千円也貸してほしいと云つていた。然し急にそんな大金が平田君に入用の筈もないし、彼の声が一寸おびえるようにふるえていた、さあみんなで行つて、プロをとつつかまえてやろう」
よろしいよろしい、そうだそうだ取つ捉えろ、行こう行こうと若手会員が張り切り出した。
その時に、そこに居合せた三十才位いの新聞社に勤めている会員が、
「毛利さん、あなたが行かなくてもよろしい、私達がかわりに行つて来ましょう」
「そうですか、いつてくれますか、若し万一のことがあればいけませんから、私は警察の方へも一寸個人的に話をつないで置きますからね、余りしつこいようでしたら誰かすぐに電話して下さい」
「なあに大したことはないですよ、じや行こう」
僕も行く、僕も行く、僕も僕もだと一行六名が足早やに出かけて行つた。平田君は度々事務局に遊びに来るので割合に顔なじみは多かつた。
舞台はかわつて、地下の喫茶ＢＸに、一行六名がどやどやとはいつて行つた。東寄りの隅のテーブルに平田君をかこむようにして二人の若い男がコーヒーを前にして座つていたらしい。
平田君の顔はやや青ざめている。
「おい、平田君どうしたんだ」
「何故に五千円も入用なんだ」
「会長が一応その人にこちら来てもらえと言つていたよ」
「それは一体何のお金なんだよ」

「とつつかまえてやろう」

皆がそれぞれ、そこに居る二人を無視したようにして、思い思いに、その五千円は何の支払いかとか、誰に支払う金かとか、又は会長の所へ連れて来いとか云い出したので例の二人の男は一人が、つと便所へ立つ様にして立上つたかと思つたらすぐ後を追うようにして残りの一人もとんでにげて行つた。

この一行の出現によつて、つまり主客転倒したわけだつた。

そこで一同着席して

「平田君、一体どうしたの」

「いやニュースに入つてね、ずい分込んでいたのよ、それで手をうしろに組んでいたらね、なんだか生暖いやわらかい感触の物体がふれるのよ、一寸好奇心も手伝つてね、指先でいたずらをしていたらね、だんだん堅くなつて来るのよ、それで当方も一寸気持ちよくなつてね、更に熱心にやつていたらよ、もう少しで頂上かと思つた頃に、そつと手をはらつてよ、そして僕の手を握つて表へ出ましょうと言つて来たのよ、まさかあんな悪い連中とも思わなかつたので、まあまあ宿賃ぐらいは負担しても良いわ、一寸いかす顔付きじやないか？　と思つて表え出たらよ、ここにはいろうというので、まあまあそれも良しと思つてさ、はいつて座ろうとしたら、すぐ後からもう一人あのがめつい奴がついて来ているのよ、そして曰く、我々はプロだ、お金は

「それは一体何のお金なんだ」

持つているんだろうなあ、と切り出しやがつたんだ、いいえ、そんなに持つていません、と云つたら幾らあるんだと聞くから全部で八百円位と云つたら大きい声で、馬鹿にするな、それしきで俺達に手を出したのか？　とか何とか云うので、恐ろしいやら情けないやらで声も出なかつた。そうして、どうするんだどうするんだとどなるので、それでは知り合いのところで借りますと云つてやつたら、その知り合いとは一体どんな人だと云うのでやはり同じ道の人で自分を何時も可愛いがつてくれる人だと云つたら、宜しい電話をしろと言われて、電話をかけたわけです」

「そうか、それは良かつた、良かつた、それにしろプロか尾を巻いてにげて行つたのはおかしいではないか、ウハ・・」

「愉快だね、愉快だよ、ほんとうにね」

これだね、会の有難味は、会員は凡てこんな風に団結すべきだね、団結の力、大勢の力、そしてその会に対しては警察側も良く了解して協力してくれる。何と力強い我々の団結と我々の組織、大勢の会員の中には種々の業種の専門家もおられる、我々の力で、団結で、何一つ解決できない問題はない程会は強力である様に、お互が会を盛り立て、会を信頼して楽しく強くいきようではありませんか。

この一件は、若しこんな風にすればと思つて書いた創作であります。

同性愛技法について

X　生

第十四号会誌に同性愛技法について若い会員の懇切なる記事を拝読して大変興味深く且啓発されました。追加の意味で一文を呈上します。実は私が初めて鶏姦と京文字を教えられ実地指導されたのは十六才の夏休みでした。

そんなことが実行出来得るかと不思議に思いましたが、相手の指導よろしきを得て大した困難もなく相手の巨大なPがゆつくりと自分の体内に進入してくるのを一種の快と共に感じ取りました。その後はなれるに従つて色々と工夫して双方により快感をもたらす方法を研究しました。諸兄の中にも充分この道を楽しんでおられる方もたくさん居られると思いますが、初心者？　のため私の経験を述べて多少とも参考となれば結構です。最も容易な方法は、相手を腹臥位とし、両腕は顔の下で枕とし両足は素直に延ばす。自分は相手の腰部を跨で自分の腰を下し相手の尻の割れ目と自分のPに充分唾液を塗り除々にPを肛門に押し込みます決してあせらず特に初回の相手にはゆつくり押さねばなりません。そうすれば多少の抵抗はありますがPは心地よくすべり込みます。それから自分の上体を相手の背に倒し、両手で相手をしつかり抱いてやつてもいいし、両手で自分の上体を支えてもよし、充分自分の体を固定してからゆつくりと腰を上下する。この際亀頭がぬけないように注意すること、相手は腰を使わぬ方がよいと思います。動作がうまく行かないとPがはずれます。射精の時のPの躍動は必ず相手に感得出来る筈です。射精後も肛門括扼筋で充分しめつけられPの勃起は長く続き、その快は到底男女の性交の快に比すべくもありません。事後の処理として特に注意したいことは、相手の肛門の処置であります。いくら練習した相手といえども多少の損傷は免れません。この節大変都合のよい薬がありますから御参考までに記しておきます

キシロ軟膏　これは消炎消毒に好適で、ほんの少量を指先につけて肛門に押し込めばたちどころに肛門の灼熱感、異物感、疼痛などが去り快適です。

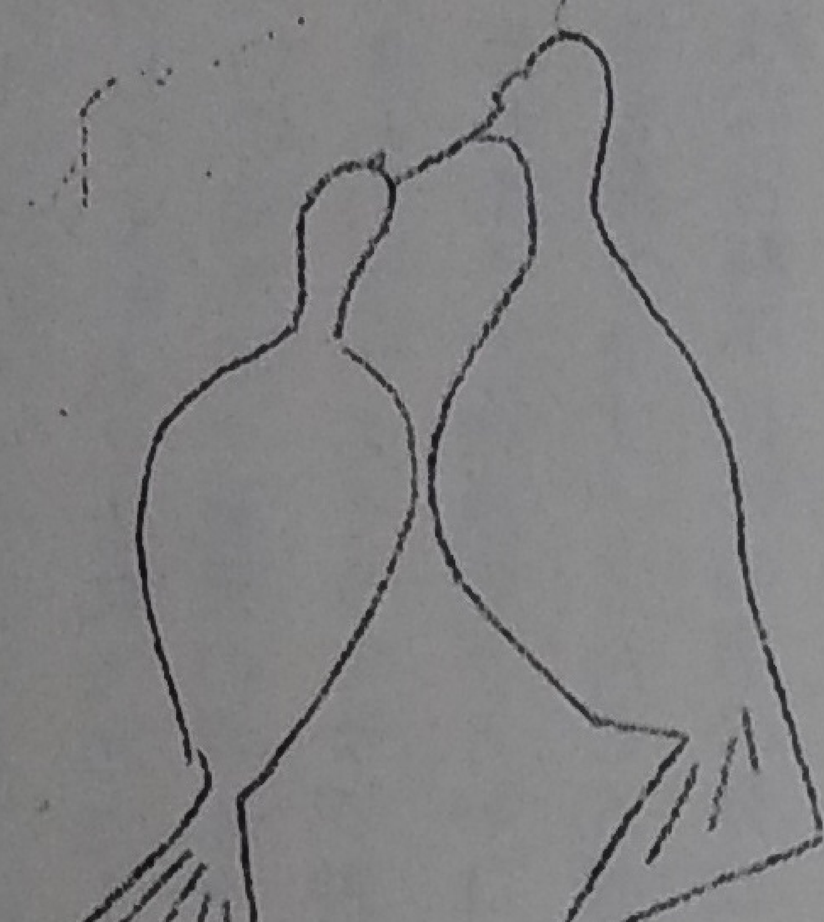
オイラックス軟膏　これも肛門の摩擦による発赤、充血、疼痛を瞬間に治してくれます。

このくらいの処置は何らの面倒もありませんから怠らぬようにして下さい。

温泉にあたたまつたあとでは特に行為が円滑に行なわれるのは括扼筋が温熱のために弛み易くなつておるためであり又行為の前に上厠すれば排便のあるなしにかかわらず括扼

ません。そうすれば多少の抵抗はありますがPは心地よく筋は弛緩のために弛るくなり、一層効果的であります。かくして数回の行為の後では何らの苦痛もなく遂行できるようになります。愛する相手のPを自分の体内に受け入れてやることも大きな喜びとなります。熟練した同志なら色々と体位の工夫もできて、一層快感を増すことでしよう。但し平素から消化器の衛生に注意し下痢をしないこと、痔病の人は早く治療しておくこと、又礼儀としても事前に上厠しておくことも奨めたいことです。

上記の軟膏はどこの薬局でも買うことができますから念の為、価格も低廉です。又滑済として唾液の代りに軟膏を用うることが一層好ましい。ただ一寸した注意を怠るために肛門周囲炎、痔核、痔瘻、切れ痔など不快な症状で医師をおとずれるような不幸のないように気を付けましょう。



又行為の前に上厠

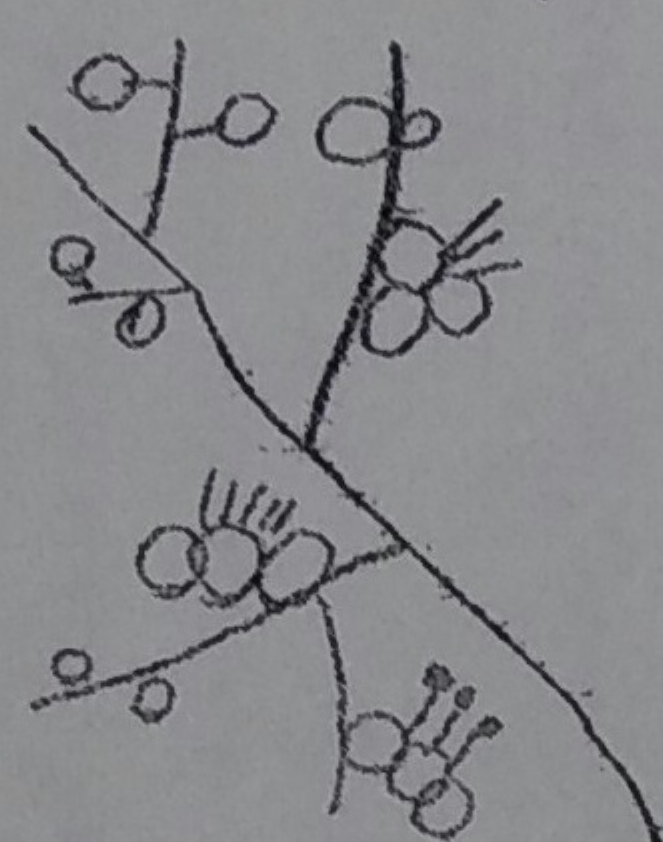
ゲイバー便り

東京、池袋のノエル、美少年揃いでサービス良いと、大変好評ですから、会員の方々は大いに利用して下さい。

大阪、千日前のクラブ　蘭丸　では開店三周年を記念して、来る十一月三十日より、十二月二日までの三日間を謝恩サービスのパーティを開催します。余興には例の如く、空くじ無しの福引券を出すそうですから、幸運の大当りを当てて来て下さい。

同好者に最も知られている大阪北のジュネ（老松と同系統）では一階を拡張しまして、サントリーバー　こゝ　を開店しました。美少年揃いの独特のサービスできつと、貴男も満足なさることと思います。従来の姉店　ジュネ　の観念よりぐつと変わつた清楚な妹店として大衆向きに設備は一流、値は二流で広く同好者に親しんでいただこうと張りきつておられますから、お気軽に是非御利用してあげて下さい。

神戸のゲイバー　タブー　さんも本号より広告のスポンサーとして、大いに協力してくれることになりました。三宮駅より徒歩で三分ぐらいの場所で、美男の青年マスターの人気で、若いお客でにぎわつているそうです。神戸に行かれたら是非タブーをお忘れなく、会員のゲイバーの催物又はトピック、ゴシップ等を募ります。どんどん投稿して下さい。但し会費未納又は広告料不払いの店の分は一切採用致しません。



会員便り

先日、大阪へ行きましたので事務所へ参りましたが、先生におめにかかれず大変残念でした。

僕は今まで内心で思つていても、その機会に恵まれず、たまたま貴会に入会できて本当に良かつたと思つております

しかし仕事の関係で、今は月曜日しか休めませんので、大阪へ行く機会の限定されることを悔やんでおります。

京都　八二四

自分勝手なことばかり申し上げ、おしかりを受けることと思つて居りましたのに、毛利様から肉親も及ばない程のあたたかなお便りをいただき、私としましては本当に頭のさがる思いで御座居ました。人並に皆様とお付合いできる私ではありませんが、今後ともよろしくお導きの程、お願い致します。

岡山　四二八

会誌を拝見し愈々会の盛大なる御発展を祈念するものであります。私は入会後、日も浅くまたその道にはウブな者ですが、幼少の頃よりの念願がようやく結実出来ることを思う時、本当に日々の生活に明るいきざしが萌えでて参ります。

長野　七五三

毛利様、お元気でお暮しのことと思います。先日から度々「ホモ」「セックス」等、色々質問したにもかかわらず、ごていねいにお答え下さつて、ありがとうございます。僕は全くホモ同好者であることがはつきりしました。今は秋の収穫で忙がしい毎日を送つていますが、毛利様や係の方の御苦労は大変なものだと、つくづく誌をみて思いました。

兵庫　八三〇

度々方々で会員かたの楽しい会合を持たれて心ゆくまで楽しんでおられる様子等を会誌で拝見し、うらやましくてなりません。それでたとえ一時間でも二時間でも若い人と話し合う時かあつたらといつも念願しておるのです。幸い会長さんの御好意で、その機会を作つていただくとは、本当に何とも感謝の言葉もありません。

来てくれる少年を失望させないよう、できるだけ歓待してやりたいと思います。

姫路　三〇六

先日、木津にては大変お世話になりました。初めての懇親会への出席にて心もとなく思つて居りましたが、現地の皆々様が心良くお話し下され、十年来の知己の如く、何のわだかまりもなく、宴会後の一時に爆笑、又爆笑と腹のそこより笑いとばし、誠に近頃珍らしい楽しい一夜でございました。これも当会あつてのこととて、毛利様がお骨折り下された賜物と深く感謝致し居ります。

京都　八二九

このようにすばらしい会があつたことを、今まで知らなかつた小生、本当に残念で仕方がありません。もつと早く会の存在を知つていたらどんなにすばらしく楽しい毎日を送ることができたろうにと思いますと残念です。まつたくすばらしい会ですね。このすばらしい会に小生も一ケ月後に入会できると思うと心が浮き浮きして落着いてペンを執つていることもできなくなりました。とに角、あの会誌を受取ることができてとつてもうれしいんです。

岐阜　八四一

さびしさに苦しくなり、仕事も手につかず、貯金をおろして大阪に行つたのでしたが、行つてよかつた。セックスは才二として、それ以上の収穫があつた。何と表現していいのか判らないか、今までは私の心に何か穴があいて寒い冷い風が吹いていた。それが先日からは違つてきた。僕は喜びと幸福感と期待に胸がふくらんでいます。心から毛利のお父さんに感謝しています。

東京　六八九

英会話を勉強したいので適当な先生をお知りあいの方がおられましたら事務所気付で御紹介下さい。できれば阪神間在住の方、週一回、欧米人なれば一番結構です。

一三一

早速会誌を送つていただきまして何回も読み返しています。

会則を送つていただいて、実は一、二の疑問を持つていました。それは入会金があまりに高い、何か意味があるのかな、ともう一つは会費の二〇〇円、会員が千名近くいること相当な金額になつてしかも世話役だけしかない。ベラベラのガリ版の会誌程度で、という風なことでした。しかし会誌をみてびつくりしました。二〇〇円の会費では会誌を毎月出すのは無理ではないかなあとさえ思いました。会誌の内容でも一驚でした。あんなずばりの表現の、又写真版の多いこともでした。以下略

神戸　八四二

ティーンエイジャーの美少年運転手を求む。

無免許の方でも、当方で指導して受験させます。

当方　会社社長　四十五才

希望者は、事務局の　毛利晴一氏まで

函館の若水会を経営している者です。待望の大阪の会事務局を十九日の夕刻訪れる機会を得ました。そして毛利さんと親しく懇談しまして今までの想像以上に本会の内容や目標等に驚き、且つ自信を得まして、大阪の特約旅館の主人の親切なもてなし等を受けまして、楽しい三日間を大阪で過し名残りを惜しんで発ちました。当地近辺の方に又旅行で御通過の方にも是非御立寄りの上、大阪の会について御不審の点が御座いましたら私から見たまま、感じたままを自信を以つてお話し致しましょう。

尚大阪の毛利様も、当若水会に対しては何かと親切に、又期待を以つて見守り、激励して下さることを約束していた

だきました。

北海道　六九八

私今度アメリカへ船を取りに行くことになりました。その船は十二月中旬にアメリカで引渡しを受けることになつておりますが、その後の受継や訓練のために帰国は来年の三、四月頃になると思います。折角発展した楽しい会から半年近くもはなれるのはさびしいですけれども、仕方がありません。しばらく休会にして下さい。

長崎　三六三

豫てから決定をみていた、在外勤務がいよいよ実行されることになりました。折角の会員になれましたのに残念ながら、しばらく休会致しますが、何とぞよろしくお願い申し上げます。

千葉　七四二

雨降れば雨に泣き、風吹けば風に泣く、何事も父親のように親しめ、そして父親のようにさとしてくれる毛利さんを知り得たことを何よりの幸福と存じます。

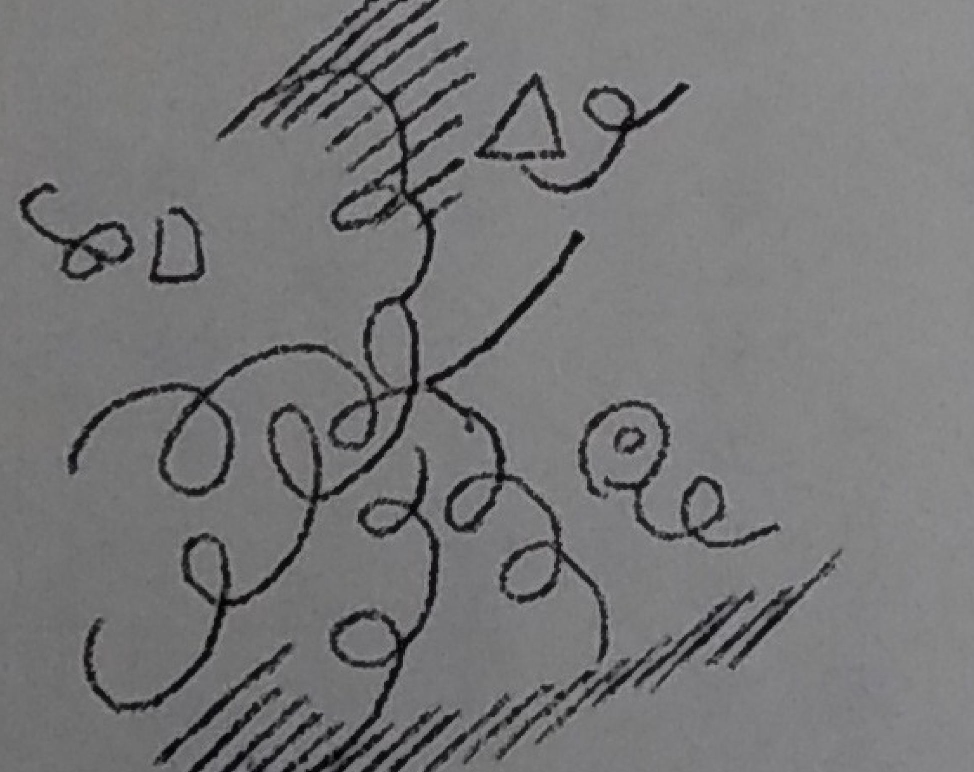
大阪　八三一

前略、地方の皆様お元気ですか。この度入会させていただきました学生です。よろしく御指導下さい。私共、常になやみ多い人間ですが、その度に事務所ではいつも毛利先生に指導していただいております。

何か地方色豊かなニュースがありましたらお聞かせ下さい。

今後とも、つたないながらも会の発展につくしたいと思っています。

大阪　八二三



事務局より

一、バッヂは既に発註済みで、現品も出来上つて居ります。早急に御申込み下さい。
価格は五〇〇円です。

二、本年六月より準備、募金にかかつておりましたクラブハウス設立の資金について、現在までに集まつたものは未だ少額にて、会員数にして約四〇名ぐらいですか。これも会員諸兄のふところ具合を考慮してあまり申上げなかつたのですが、年末にはボーナス又は越冬資金等もあることと思いますので、是非この際、本会発展のために御協力下さい。

三、会費の納入のおくれている人、又は後払いになつている方はこの際に必ず完納して下さい。

四、地方会員の方で、年末年始の休暇を利用して来阪される方はスケジュールを早い目に会事務局まで出して下さい

五、会事務局は年末年始は全然休みません。
年中無休ですからどしどしお越し下さい。

六、会との通信には必ず会員番号を記入して下さい。未だに徹底しませんから再び御願いしておきます。

七、最近投稿が減つてきました。皆さん多忙でしようけれども、たとえ五行でもよろしいから、御意見、御希望、其の他ローカルニュース等を、どしどし投稿して下さい。

八、四国地区の才二回懇談会を前回と同じ場所で左記の通り開催致しますからふるつて参加して下さい。会費五〇〇円、当日払い。

日時　昭和三十六年一月五日午后六時より
六日午前十時まで

場所　新居浜市角野町
龍河温泉にて

準備の都合上、出席は十二月二十日までに、会事務局まで御申込み下さい。

九、交際申込みを受けた人、及び会員より手紙を受取つた人は必ず早い目に返事を出して下さい。諾否、又は文通を続けるや否やは御自由ですが、回答だけは必ず出して下さい。

一〇、昭和三十六年元旦を迎え、新年宴会のカクテルパーティを前回と同じ　大阪球場内文化会館二〇五号室で左記の通り開催致しますから振つて参加して下さい。

日時　昭和三十六年一月四日
午后一時より六時まで

会員券　各日金六百円也

だ会との通信には必ず会員番号を記入して下さい

会員券　各日金六百円也

但し前売　五百円也に割引

余興

日本舞踊　洋舞　のど自慢　等

既発行会誌御入用の方は、各号金一〇〇円の割合で販売しますから、現金を添えて申込んで下さい。（但し残数売切れの場合は御容赦下さい）

最近、電話又は電報で写真を注文される会員がありますか、これは絶対にやめて下さい。
今後電話又は電報での注文には応じません。

予定としましては、来春一月末に神戸、二月に京都、三月に東京、四月に東北地方の順序で各地域の顔合せ懇談会を開催したいと思つておりますから各地方の会員の方にもできるだけ会合場合の斡旋等に協力して下さい。

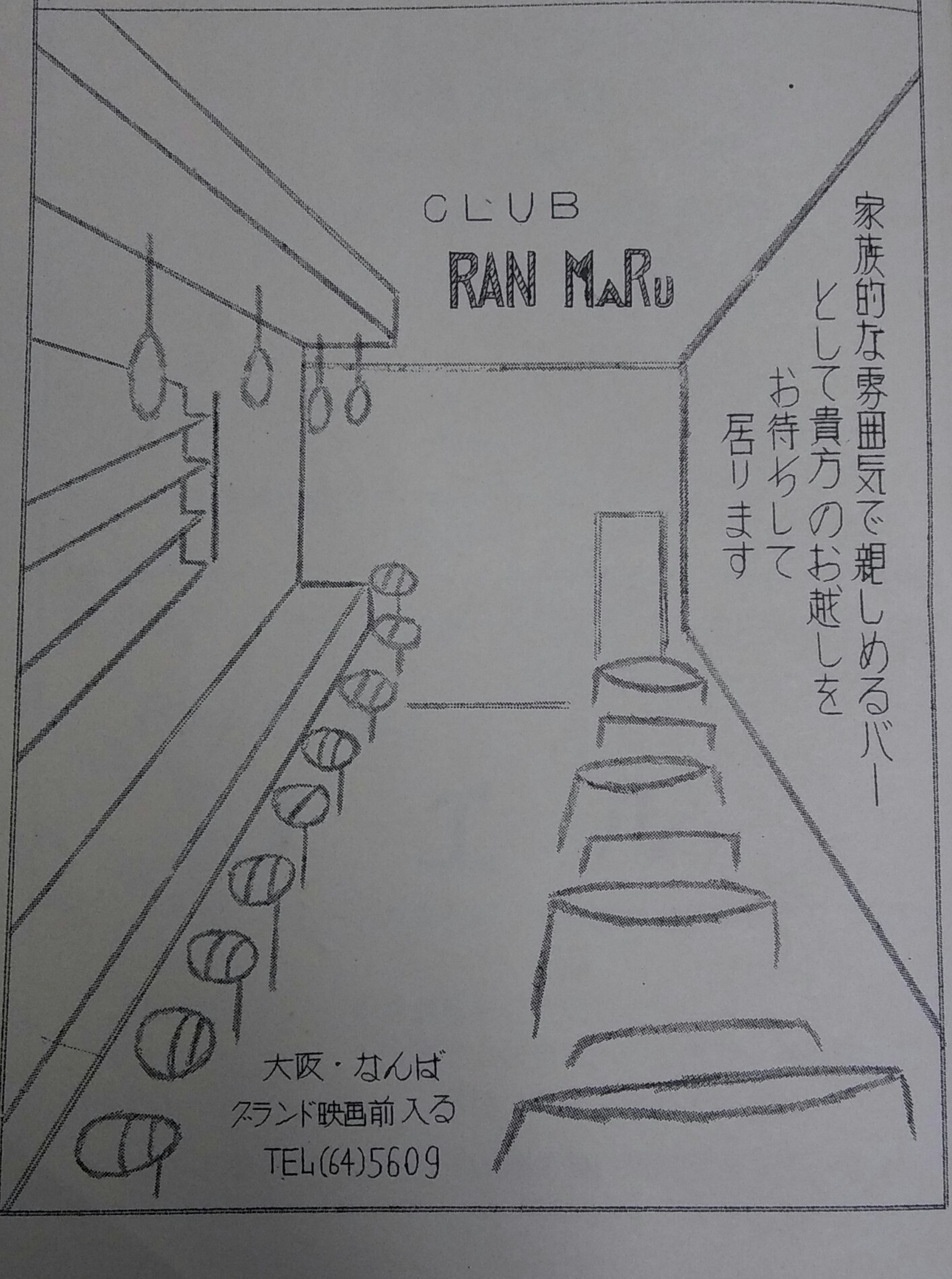
会員の一部の人より会誌にもつと露骨な記事をそして露出した写真を掲載するようにとの希望かありますが、これは会の品位保持と又取締当局の限界の範囲を出ることになり、会の将来の健全なる発展の基礎を弱めることになりますから当分この程度で編集しますから御了承下さい。現在の会誌は警察の希望で一部宛渡しており、当局も又本会の趣旨を理解してあたたかい目で凡て協力してくれておりますから他のいかがわしい会のように突然手入れ等の心配はありませんから御心配なく。念の為

来春早々ぐらいに新しい名簿を再製作する予定ですから名簿未提出者及び訂正希望者は早急にその旨（記載事項記入して）会事務局へ御通知下さい。

年末年始は郵便物輻湊のため、遅延することがありますから凡ての書類は早い目に又金銭送附等は書留郵便を利用して下さい。

会事務所に来られた場合、大勢の会員の中に自分の理想の方が居られたら御遠慮なく御希望をそつと事務局員まで耳打ちしていただきましたらその相手の方を別室に呼んで意向を聞いて見て、双方の希望が一致すれば、早速御紹介致しますからどしどし申込んで下さい。若し希望が外れても会員同志の間柄ですから恥しい等とお考えになる必要はありません。大いに当つて、くだけて下さい。

安心して遊べる会員の店



安心して遊べる会員の店

スタンド と お座敷

閑静な場所に行届いた
設備の 和洋室を
何時でも お気軽に
御利用 下さい。

老松
おい まつ

大阪市北区浜崎町24番地　TEL (37) 9096

特約旅館

にしき



御宿泊	一人	400.—
〃	二人	700.—
御休憩	二人	350.—

大阪市南区河原町二丁目一五一一

（ナンバ高島屋東側ガソリンスタンド南東入ル
初メテノ道ヲ南入ル西側）

電話 (64) 7741
ナカ ナカ ヨ イ

安心して遊べる会員の店

ニッカー　バー

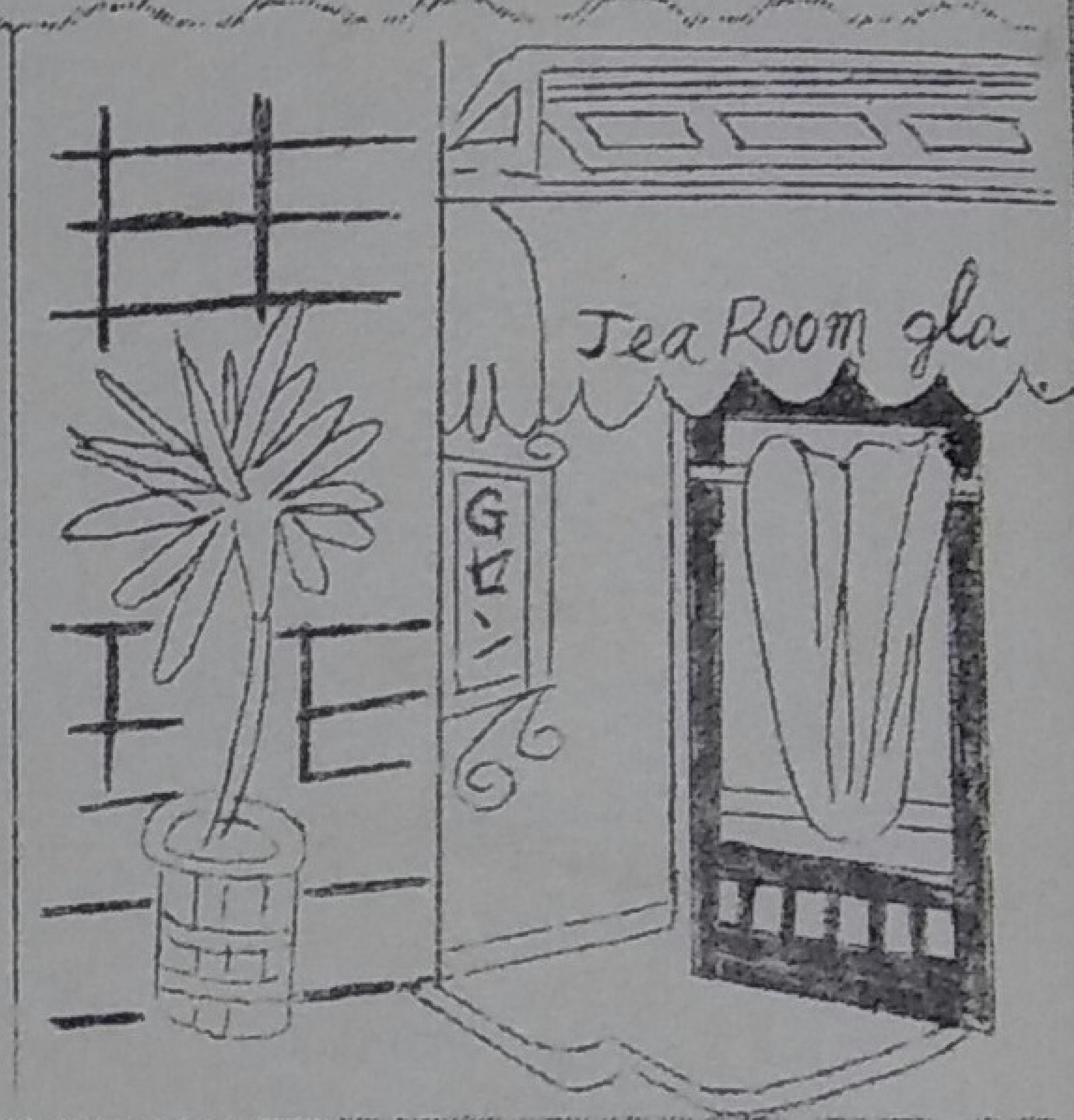
BLUE SEA

岡山市内山下35

同好趣味の会

岡山地区　世話役

Gセン



大阪市西成区今池町八番地

但し　南海今池駅東国道踏切横

TEL (63) 2836

ニッカー　バー

タブー

三宮駅より徒歩で三分位

美少年募集

地方の方を

歓迎します

神戸市三ノ宮加納町三丁目西山側

会事務所見取図



至四ツ橋経由
↑ 大阪駅前
至心斎橋経由
↑ 梅田
N
(御堂筋)
湊町
湊町駅
賑橋
大阪市浪速区元町三丁目
TEL(64)七〇九八
会事務所(ブリキヤ2階)
住友生命
元町三丁目
大国町
ナンバ
高島屋
(南海電車のりば)

会員番号	882

会費 拾壱月末現在	残高	
	不足額	